

法燈大に輝いて居つたことである。然るに星霜の移ると共に、何日の頃よりか、漸く廢類し、明治初年には、終に廢滅に歸して今は只昔を語る、十數基の墓標と、時に、布目の古瓦や、壺などが發見せらるゝに過ぎない。尙此の地には『寺内』『大門口』等の地名が、残つて居る。

廢寺の時、寺寶の主なるものは、多くは買却せられたが、其一部は幸にも、同地の舊家、奥城徳右衛門氏方で、保管したので、纔かに紛失を免がれた。其等は今、同家から、明王寺に托して、保存せられて居るが、此等の中には、楠氏の所持と傳ふる、非利法憲天の長旗などがある。

極樂寺

大阪鐵道の長野驛から、北方へ僅か二町許りで、大字古野の台地の北端に、極樂寺がある。寺の門前には、高野電車の線路が、斜に貫いて、線路の上に、三咲橋といふ

欄橋が架けてある。

當山は、丹南の來迎寺、大ヶ塚の大念寺等と共に、融通念佛宗の中本山で、攝河二州六別寺の一に當り、世に謂ふ錦郡辻本であつて、錦溪山、安養聚院と、號して居る。本尊は、阿彌陀佛で、脇壇に觀音像と勢至像とが、安置してある。寺傳に依ると、後醍醐天皇の元享元年、法明上人の開基に、係はる寺で、慶安年中には、領主なる膳所藩主本多氏の歸依厚く、菩提所に準じて、同家累代の靈牌を安置せしめ、毎歲金穀の、寄進などがあつた。慶長八年には、本郡上原の人、中村與次郎、法名祐算上人當寺に入つて、興隆に盡し、庫裡の改築を行ひなどして、寺門一層榮ゆるに、至つた。今の本堂は、其後寛政年中、當寺住職、洞山上人の時、改築せるものである。

長野遊園地

長野遊園地とは、長野町の東端に、聳ゆる富山丘陵と、其の麓を流るゝ、西條川一

帯の地とを、云ふのである。富山丘陵は、其の昔長者屋敷と呼ばれた處であつたが、近年に至つて、高野電鐵會社が、雑木を伐て、數千の櫻楓を植え、斷崖の上には、丹碧の樓閣を建て、又は、山を拓きて、運動場を設けなどして、遊園地としての、經營をなした。此は脚下に、水清き西條川の、流るゝありて、天然の風光亦頗る佳い川に沿ふては、數軒の料亭が、建て並んで、客を迎へて居るが、中にも楠館の如きは、川に倚り、山に對し、温泉の設備亦整ふて、一日の清遊には、至極適して居る。尙此丘陵の上には、其の昔、諸越の長者が住んで居て、黄金を埋藏したと、傳ふる「黄金塚」、や朝な夕な箸を捨て、成れると言ひ傳へ居る「箸塚」。又は楠公の駒を繋げりといふ「駒止の松」のあつた塚などが、其處、彼處に残つて居る。遊園地の下の、瀧畑川と、三日市川との、合流する處に、高さ十餘尺の奇岩があつて、古くから、行者岩の名で呼ばれ、豪雨の日、水流の之れに激して、急端をなせる

は、一段の景を添ゆるのである。

金胎寺城址

西條川に架せられたる、諸越橋の東畔から、川に沿ふて下ること、彼是れ數丁にして、西條川の河底に、丸形の大きな岩がある。之れは俗に、媼石と呼べる岩で、其の東方の山中、荒草の裡には、又爺石と呼べる巨岩がある。これ等は、彼の諸越の長者が、齡老い、零落して、衣食に窮するに及び、此處に來つて、老翁老婆共々、石に化したそれであると、言傳へて居る。之れは、元より附會の、甚だしきもので、眞に一笑に附すべきでは、あるが、偶々、山や河に、巨巖の有つた所から、思ひ附いた童話で、豪家の末路を語る、多少の教訓であるから、特に書き加へて置く。此處から、數町北へ進んで、大字嬉の邑中から、小徑を東へ取つて、竹林の間を抜けると、用水池がある。昔は此の池の邊りに、金胎寺の大門が有つたとかで、今も此

の地を、大門池の名で、呼んで居る。池の東に沿ふて、幾程かの平地と、石垣の残跡と、數基の輪塔とが、茫々たる寒草や、疎らに生えた雜木の中から、纔かに見出される、此處が即ち金胎寺の、廢址である。

此の廢寺址の前から、急峻な山道を、迎るとものゝ數丁で俗稱「城山」の頂上に出る。此の城は、正平年中、後村上天皇が、行在所を觀心寺に、遷され給ふた時、楠木正儀、和田正武等の構築せる、世に金胎寺城と云ふ城である。後、寛正四年には、鳥山義就亦此城に據つて、嶽山の龍泉寺城と呼應して、甘山に據れる同族の政長に當つたこともあつた、又一説には、元弘の昔、楠木正成此れに、城寨を構へて、部將佐備氏を置いて、西面の防禦に當らしめたとも、傳へて居る。そして其等の戰の度毎に、山麓の金胎寺は、當時巨剎であつた爲め、必ず利用せられて、居つたらうと思はれる。今では、山頂に少許の平地を存して、古井戸、塹壕、樓櫓の跡などを、見出される。

に過ぎないが、然も、東は甘南備を隔て、金剛葛城の連山や、赤阪、本宮の諸城寨に對し、西は遠く、大阪、堺を展望し、尙、北は、谷を超へて、嶽山の寨に向へるなど、確に嶽山連山中の、半孤立的の要害堅固の城寨であつたに相違ない。此山頂亦四時の眺颯頗る佳である。

河合寺

諸越橋から、觀心寺街道を、八町程進むと、路の左側に頗る急な、阪路があつて、其の阪の兩側には、數百本の櫻樹が、植えられてある、これは河合寺の裏道である。寺は山の中腹に在つて、現今では大に頽廢し、何等輪奐の見るべきもの無く、只纔かに假本堂、鐘樓、鎮守堂、寶庫等の小堂宇と、些やかな庫裏とが、淋しく建てられて有る許りだが、開基を釋ねると、頗る古く、殊に朝廷の御祈願厚くして、寺領廣濶本堂を中心として、七堂伽藍悉く備はり、僧坊亦二十四ヶ寺の多きに及び、尙寺格甚

だ高くして、河南三大古刹の稱ある、觀心寺、金剛寺の上班に立てる、眞に河南第一の名刹であつた。

されば現今でも、其の寶庫の中には、國寶の三大佛を始め、幾多の佛體や、古文書などが、收められて居る。

寺傳に依ると、今を去る一千三百餘年前、即ち皇極天皇の、即位二年に、蘇我入鹿が、勅命を拜して、當地に來り、藏王權現と千手觀世音との、出現を拜せるに基き、此處に伽藍を建て、其の千手觀世音を、本尊として、祀るに至つたのが、當山の草創であつた。其の後、二十餘年を経て、藤原鎌足、天智天皇の勅を奉じて、再び伽藍の造營を行ひ、之れより勅願寺とせられた、尙、百數十年を経て、弘法大師も、當山に留錫し専ら練行せられて居つた。其の際大師は、高野、丹生の二明神を、此處に勸請して、永く當山の鎮守となし、其上尙幾多の僧坊を増建して、法燈頓に輝くに至つ

た。降て、又後醍醐天皇大塔宮も、深く當山に御歸信あつて、幾多の寺領を寄せ、正成亦厚く歸依して居つた。然るに、寛正年間に至つて、祝融氏の崇る所となり、其の堂塔伽藍が、烏有に歸してからは、次第に衰運に傾き、加ふるに、天正の頃、再度兵火の災を、被るに至つて、全く衰微の極に落ちた。其後幸にも、豊臣秀頼資を投じて再築を企てたが、終に舊觀を復する能はずして、逐次頽廢し、只纔かに、法燈を繼ぎ居る有様で、古佛像、古文書、此の外の寺寶の如きも、多くは散逸し、其の一部が、御室の仁和寺に保管せられて、辛くも紛失を免がれて居つた。斯くて、明治五年頃には、本堂すら賣却せられ、一時は全く寒烟荒草の裡に、埋没せらるゝに至つた。其の後に至つて、漸くにして假堂を建て、寶庫を設けなどして、近來稍復舊の運に向ひつゝある、有様である。

寺は寶珠山と號して、眞言宗古義派、御室仁和寺の、末寺である。今の假本堂には

千手観音と藏王權現との、木像を安置し、尙、正成の守本尊と傳ふる毘沙門天像と、南朝護摩堂の本尊と傳ふる、不動明王の像などが、配祀してある。

寶庫には、國寶の多聞天立像、同持國天立像、同大日如來坐像の木像を始め、藥師如來立像、胎藏界大日如來像などの、數軀の佛體を收め、尙古文書數十通を藏して居る。之等諸佛體の中、國寶佛の如きは、刀法頗る優秀にして、眞に入神の作である。古文書の中には、後伏見帝の宸翰、楠木正儀の燈油寄進狀、上郷大納言の宣旨等は、顯著のもので、中にも次に記せる「三寺集會連着座之事」を規定せる文書の如きは、當寺の最も、誇りとして、居るものである。

三寺集會連着座之事

限大川西向連着座

金剛寺左座
觀心寺右座

自川東連着座

觀心寺左座
金剛寺右座

河合寺上横座

右任寺位、先例可令並衆會連着座定者也

正平三年五月十一日

河合寺々僧御中

右馬權助

鐘樓に吊るせる梵鐘は、直徑約三尺、高さ四尺五寸、正徳二壬辰五月廿一日、攝州大坂住人、井上治兵衛尉、藤原吉政の鑄作せるもので、其の音響の宜いので聞えて居る。又境内の一隅には「楠公遺愛の碑」と稱して、世に名高き、石碑が建つて居る。之れは、寛保年中に、狹山藩主、北條氏の老臣、朝比奈頼母が建てしもので、其碑文は服部南郭の撰であるが、歳久しく、風雨に晒されて、今は其の文字が讀み難い程になつて居る。(碑文略)

觀心寺及楠木正成首塚

観心寺は、長野町から約三十町東、川上村大字寺元で、松檜の鬱蒼として茂れる、山麓に、廣大な一廓を構へて居る。石垣の上に設けたる、塀牆に添ふて右に廻りて、南門から、北に見上ぐると、幾つかの石段を隔て、本堂に對する。此の南門は梁行二間、桁行三間、萬治二年、江州膳所城主、本多下總守俊次の建立である。

南門を潜ると、小池を隔てた右側一帯に、數千株の櫻樹を植付けて、今庭園となつて居る處が、昔の塔頭總持院の址で、正平年間、後村上天皇の、行宮とせられ給ふた處である。現今は池中に、方形に封土を盛つて、其の上に一碑を建て、後村上天皇行宮の舊跡たるを、不朽に記念して居る。これに對せる左側には、寶庫を設けて、後説する所の、國寶其の他の寺寶を收めてある、拜觀希望者には、特に案内者を附して懇切に説明して呉れるのである。

後村上天皇舊趾碑の、北で一段高き地域に、訶梨帝母天堂と拜殿とがある。之れ等

の建物は、興國五年、後村上天皇の御代に、一度炎上に及んだが、不思議にも、御神體は無事なるを得たので、間も無く再興あり、又其の後、慶長十九年に至つて、豊臣秀頼、家臣片桐且元に命じて、更らに造營せしめた。只今の建物は此の時、建立せしものである。訶梨帝母天は、當山の鎮守で、御神體は、毘首羯磨の作、赤梅檀丸木造にて、弘法大師の、唐朝より將來せしものと、傳へて居る。拜殿と鎮守との中間には、些やかな、一池があつて、其の上に、勅使橋と云ふ、一欄橋が、架けてある。

偕正面の石壇を上つて、本堂の前に至ると、其の直前には、禮拜石と、南蠻鐵の燈籠とがある。禮拜石は、扁平なる巨岩で、其の周圍を、石墼で圍んである。寺傳に依れば、空海、練行の際、此の上に座して、七星を拜まれたるもので「七星降臨の跡は境内の各所に、散點し、今は樹木鬱蒼とし、木柵を設けて、其の場所を示してある。燈籠は寺記に、後白河上皇御下賜と傳へられて居るが、其の銘には「貞永二年癸巳中

春日願主沙門良心、大工大原光とある。貞永二年は、四月十五日を以て、改元が行はれて、天福元年と改められ、其の時の上皇は、後堀河にて、在らせられたのである。此の事實から見れば、寺記の「白」は「堀」の誤記であらうと思はれる。其の高さは約六尺、臺柱の周り、三尺五寸、上方に陽鑄の銘文があり、火袋の四方には、透し井筒形の中に、四天王を現はせる、真に古雅掬すべき逸品で、現に國寶の指定を受けて居る。

本堂は、七間四面、向拜三間、屋根は入母屋造、本瓦葺の建物で、特別保護建造物である。此の建物は、淳和天皇の御創立其儘で、外陣丈だけは、建武年中、後醍醐天皇の御再建に係はり、楠木正成が工事を督せるものである。尙慶長十八年に至つて、豊臣秀頼、片桐且元を奉行として、又修理を如わせた。本尊には、七星如意輪觀音大士の像を安し、不動明王と愛染明王との兩木像を、脇立として祀つてあるが、孰れも

弘法大師作と傳ふる靈佛で、現に國寶である。殊に本尊は古來秘佛とせられて、容易に拜する事を許されぬが、其製作頗る優秀で、頭に透彫の寶冠を戴き、少しく首を傾けて、蓮座の上に片膝を立て、座せる姿は何共云へぬ姿勢で、手は六臂で其の一の指頭に、寶輪を捧げ、背には火炎を付した、二重の圓き光背がある。其の温和な豐な顔と、無限の慈悲に満ちた、雙の眼と、温く柔かな神秘的の尊容とには、何物でも濁仰せずには居られない、無限の力を持つて居る。之れを要するに、其彫刻上の技巧に於ては真に弘仁時代の、代表的傑作である。不動明王は、建武年中、後醍醐天皇が、宮中に奉迎して、親しく御祈禱ありし靈像で、愛染明王は、舊と、禁裏の御本尊であつたのを、正平十五年、後村上天皇が、當寺に安置せしめられた、是れ又靈佛である。堂内には尙此の他に、弘法大師一木作りの、國寶四天王、同八大觀音大士、愛染明王等の諸佛體が、安置してある。

中でも此愛染明王の木像は、大師作白栴檀の白木造にて、舊と、宮中の眞言院に安置せし、靈像なりしを、元弘元年、後醍醐天皇が、軍陣守護の爲にとて、楠木正成に賜へるものである。正成はこれを深く、歸信して居つたが、戦歿の前日、湊川より當山に送納せられた、先年大阪府下に、大演習の行はれた際に、勅命に依りて、親しく天覽に供し奉つたのも、此の靈像である。

本堂の東隣に並んで、後龜山天皇の、御叡信あらせられた、大威徳明王を、本尊とせる牛瀧堂がある。其の又東隣の池中には、辨財天を祀れる辨天堂がある。これから東へかけては阿彌陀如來を本尊として、世に御靈屋の稱ある經堂、弘法大師の木像を安置せる大師堂、役小角を祀れる行者堂などが、取次に建て並んで居る。之等の諸堂の向側には、藁葺假屋根の、初重のみの塔がある。これは三間四面の建物で、其の昔楠木正成願主となつて、三重の塔を建立せられんとしたが、會々湊川戦役の起るに及

び、遂に志願を果すを得ずして工事半ばに止みたるもので、世に建掛け塔と呼んで居る塔の前を東すれば、地區の一段高き處に、本願堂があつて、それに道興大師の木像を、安置してある。

大師は讃岐の人、俗姓佐伯氏、名は實惠、道興は其の諡である。空海の高足で、兩部密教に精通し、天長四年には、當寺の開基となつた人で、當寺の後山の名に因て、又檜尾僧都とも稱した。承和十四年十一月十三日、示寂したので、茲に葬つた。今堂の後に、圓形に封土を盛れる塚は、即ち大師の廟墓である。

其の東隣には、大楠公正成の、首塚がある。塚は石階十數級の上で、石にて二重の玉垣を繞し、其の中に、御影石の二重臺座の上に、五輪の塔が建て、ある。正成湊川で戦歿するや、足利尊氏は、家臣世瀬川有隣を使節として、公の首級を、千早城に送らせた。そこで正成の遺臣等相議して、家臣安間七郎、生地兵衛等正成の首級を護て



楠公首塚

當寺に致し、此處に懇ろに、葬つたのがこれである
と、言ひ傳へて居る。塚の前には「文化二年歲在乙
巳春正月、浪華の儒者、篠崎弼撰并書」の碑と、武
藏國野村源定信の「詠楠正成卿歌並短歌」の碑とが
左右に立ち、又中井履軒の書「忠廻倒日義凌清霜」
楠公之元千載如生」と刻せる、天明六年丙午四月建
立の石燈籠が一對建てゝある。尙此の近くには、鳥
山尾張守政國、同照高等の墓標が散點して居る。
書き落したが、大師堂の前には、仁明天皇御下賜
の、瑪瑙石の石燈籠と稱ふる、古色蒼然として、稜
角殆ど磨滅せる高さ約五尺八九寸の、古雅な石燈籠

がある。

當寺の縁起に就いて、少しく述べよう。

當寺は、文武天皇の大寶年中、役優婆塞小角に因て、創めて、開かれたる名利で、
最初は、雲心寺と號し、其の峰は、八葉に聳れて高く、谷は四方を繞りて深く、眞に三
密の觀念成し易き、塵外の仙境であつた。其後、弘仁年中に至り、弘法大師、唐土よ
り歸朝の後、此地に留錫して、大に佛法の弘通に盡し、本尊七星如意輪觀世音菩薩の
尊像を、自ら刻んで本堂に安置し、寺號を觀心寺と改められたが、ついで、法嫡道興
大師に譲られた。そこで、道興大師は、東寺長者の要職を辭して、當寺に隱棲し、心を
大に佛法の興隆に盡し、當寺の開基として、崇敬せらるゝに至つた。斯くて、嵯峨天
皇は、當寺の御叡信、殊の外篤く、勅額を賜ひ、又始めて勅願寺と定められた、次代
の淳和天皇は、伽藍の建立を命ぜられ、且仁明天皇は、官符を下して寺地千五百餘町

及び、宸翰縁起などを、御下賜あらせられた。爾後御歴代、勅願寺として、御歸信厚く、勅施の官符を賜ふこと、數回の多きに及んだ。降て、後醍醐天皇に至りては、尊崇又別して深く、屢々、賊徒滅亡、王業恢復の祈誓を籠めさせ給ひ、建武中興の偉業、成るに及んでは、特に、楠木正成に命じて、金堂の修覆を營ましめられた。後村上天皇未だ皇子にて在らせられし砌、北畠顯家を俱して、奥羽に御下向あるに當り、當寺に安置せる、不動明王の靈像を迎へて、親しく戰勝を祈られた。其後、帝位に即かせられて後は、愈々當寺に御歸依あらせられた。斯くて、正平十四年十一月には、楠木正儀、和田正武等を俱して、當寺に行幸あらせられ塔頭總持院を以て、永く行宮と定め、且つ永世不朽の、勅願寺たるべき綸旨を給はつた。後、天皇、住吉に崩御遊さるゝに及び、御遺詔に因て、當寺の境内に、葬り奉つた、今の寺後に在る檜尾の御陵が、即ちそれである。尋いで、長慶、後龜山の兩天皇も、屢々當寺に臨幸しました

然るに南風競はず、楠氏の一族も亦滅亡する所となりて、世は終に、足利幕府、極盛の時代に至り、さしも隆昌を極めし、當寺も漸く衰兆を萌し、加ふるに、天正の世に及び、織田信長の爲めに、其の寺領の多くを、沒收せらるゝに至つては、愈々頽勢日に逼つた。然るに幸にも、慶長十八年には、豊臣秀頼の歸依に因て、金堂其他の修築を見るに至り、天保十九年に及びては、有栖川宮家の、祈禱所たるを命せられ、茲に聊か衰運を挽回して、明治に至つた。其の後は、保存金、本堂修繕資金、寶物修繕資金等、數度内務省よりの下賜金あり、尙信者の淨財を寄進する者、日に加はりて諸堂宇の修理、漸く成つて、稍々舊觀に復するの機運に向ひ、以て今日に及んで居る當寺の寺塔中に、中院と云ふ、楠氏累代の菩提寺がある。現今、表門の前に、あるのがそれである。所傳によれば、正成の祖父、楠木正俊なる者、父祖の冥福を祈らんが爲めに、文永年中、此處に一字を建立せるに創まる。正成八歳の時より、此の中院

に來寓し、院主瀧覺坊を師として、文學を學び、人格を鍊へ、稍長じて、十五歳となるに及びては、舊錦部郡、加賀田の郷士、大江修理亮時親に就き、兵法と武藝を修め、里餘の路を遠しとせず、朝夕此處より通學せられた。斯くて、賊徒討滅の勅を奉ずるに至つては、此處に妻孥を托して、身命を王事に抛ち、其の湊川に戦はんとするに當りては、延元帝より賜はれる、軍陣の守護佛愛染明王の像を始め、佩刀具足等を、中院に遣り來つた。正成戦死の後、尊氏より送れる父の首級を見て、正行が自害せんとしたと、傳へらるゝ美談も、此の中院であるとも言

觀心寺中院



ひ傳へて居る。

之を要するに、當寺は、史徵墨寶などにも、見ゆるが如く、終始勤王に盡して、南朝と盛衰を共にせる、稀れに見る巨刹で、當寺の衆徒が、常に王事に勤勞せし、其の不朽の功績は、永く青史を飾るべきである。

眞に、荒草の中に埋れた一石にも、風霜の裡に残りし枯幹の一株にも、一篇の哀史を語らざるなく、當年を追懷すれば、蓋し感慨無量である。

當寺の寶物は、孰れも、我國史の證徴となり、且美術の模範となるべき、貴重もののみである。今陳列場に陳べてあるものゝ中、國寶を始め、其他の優なるものを、擧げて見やう。之れを佛像に就て見れば、弘法大師が、當山の本尊を刻するに先立つて、試みに造作せると傳ふる、試作七星如意輪觀音像、金銅釋迦如來半跏像、金銅如意輪觀音半跏像、金銅觀世音菩薩立像、木造厨子入聖僧坐像、木造八大觀音立像八軀

等は何れも悉く國寶である。此の他、金銅花瓶一對(金銅蓮花三莖一對附)と傳楠正成所用の腹卷(藍革肩赤威)一領とは、亦國寶である、佛畫には訖磨法眼の筆國寶大隨求明王畫像、傳弘法大師筆愛染明王畫像、同兩頭明王畫像、同大佛頂陀羅尼、傳巨勢金岡筆如來荒神畫像、其他寫經には傳菅原道真筆般若心經、陸奥國司藤原秀衡の寄附せる紺紙黃白金泥寫經等が主なるものである。宸翰及古文書等には、紙本墨書觀心寺勸錄資財帳の、國寶を始め、後龜山天皇御與書觀心寺實錄緣起帳、後小松天皇御與書觀心寺緣起實錄帳、安永三年十二月開山實惠僧正に道興大師の諡號を授けられたる、後桃園天皇勅書、天保九年正月御祈願所御下命の有栖川宮令旨、堀河天皇寛治元年應宣以下拾九通の應宣集、後醍醐、後村上、長慶、後龜山四帝の繪旨合せて參拾壹通、教書國宣及南朝公郷の書翰合せて五拾七通、楠木正成正行正時正儀の書翰合せて拾四通正平三年八月、北畠親房が吉野朝の興隆を祈りし折の願文。正平、慶長より文龜年

中迄の諸家の書翰、應永年中より元龜年中迄の畠山其他諸將の書狀合計百四十二通、豊臣秀吉の朱印狀、享保十四年紫野大心長老撰並書に係はる正平帝記楠公傳、享保十一年本寺、一藁法印堯惠の著せる、檜尾山指藏記四冊、古來本寺の秘藏にて、撰者不詳の楠河州傳などは其の特殊のものである。其他、峨嵋天皇勅額一面、慶長十八年豊臣秀頼の再興に當り奉行片桐東市正且元の署なる、金堂修理の棟札、後村上天皇御寄附殘月硯、五輪形水晶舍利塔、弘法大師唐朝將來の法性塔、同飛行獨鈷杵、傳正成公所持非利法權天の軍旗、正行の刻せる長九寸の正成の木座像、尙此の他、短刀、劍、乘鞍、劔袋等が整然として館内に陳列保存せられて有る。尙又平瓦二枚あつて、其の一には「觀心寺金堂、元龜三年二月吉日、瓦大工天王寺」他には「文祿四年寺工」の箋書がある。前者は楷書、後者は行書で共に典雅な文字である。次に古文書の中、最も有名のもの二三を次に鈔録して置こう。

後醍醐天皇繪旨

○後醍醐天皇、隱岐より、還幸後、弘法大師作觀心寺不動尊を、宮中に召し給へるもの。

大師御作不動、可被渡進之由、天氣所候也、仍執達如件。

十月二十五日

宮内卿經孝

觀心寺々僧中

楠木正成添狀

○前狀後醍醐天皇、大師作不動尊像を宮中に召されんと思せられしにより、楠木正成が其由を、瀧覺に傳へし折の正成の眞筆。

此之間何等事候乎、抑爲御祈禱、觀心寺大師御作不動、可奉渡之由、被下繪旨候之間、申遣寺僧方候、明後日二十八日御京着候之様可被奉渡候也、御共

に御上洛候へく候、心事期面候、恐々謹言。

(後世追筆)(元弘三癸酉)

十月二十六日

正 成(花押)

瀧覺御房

楠木正行書狀

○觀心寺の鎮守、訶梨帝母社壇、火災に罹りし時、神體無異の奇瑞有りし爲、正行之を、後村上天皇に奏問すべき由を、觀心寺に傳へられたるもの。

鎮守社壇回祿事、殊以驚歎入候、但神躰不燒失、火中御座之條、末代之奇瑞、言語道斷候、急可經奏聞候、恐々謹言。

(後世追筆)(興國五)

五月廿六日

正 行(花押)

観心寺々僧御中

後村上天皇繪旨

○観心寺の鎮守、社壇回祿奇瑞の事、正行の奏聞によりて、後村上天皇社壇再建の繪旨を、観心寺に下されたるもの。

當寺社壇回祿事、奏聞之處、粉楡靈樞既雖及炎上、栴檀神躰猶令存火中之條、威驗之至、敬感殊甚、早勵土木之功、宜專谿草之奠者、天氣如此、悉之以狀。

興國五年六月三日

大藏 郷(花押)

観心寺々僧法中

右に掲げし文書は夙く世上に著名のものである。

私は最後に、楨本院の事を書き添えて、置かねばならぬ。

楨本院は、今の観心寺方丈であつて、前に述べし境内の西隣に在る。此建築は靈應

殿と稱へ、別に本院の持佛堂として、殊勝閣が、西方の一隅に相連つて居るが、之等は共に、天正中豊臣秀吉が、大阪城の建物の一部を、此處に移築せると、傳ふるもので、結構頗る宏壯である。殊勝閣には、本尊として、胎藏界大日如來の木像が、安置してある。

後村上天皇陵

観心寺境内の、行者堂の東から、溪間に沿へる、御陵道の石階を登ると、其の兩側は、古松、老檜の大木が、鬱々として繁り青苔滑かにして、些の塵を止めざる、眞に淨寂の境がある。此の奥の山の狭間に、後村上天皇の御陵、世に謂ふ檜尾陵が、嚴として存じて居る。元此の御陵は、單に御塚のみで、観心寺僧が、守護し奉るに過ぎなかつたが、明治維新前、其の筋に引き繼がれた。今御陵の内部に在る石柵は、維新前に、戸田大和守の、修築せるもので、外廓のそれは、其後宮内省にて、竣功せられ

たものである。周圍四百六十六間、誠に狹少なる兆域である。天皇は御諱義良、後醍醐天皇の第七皇子、御母は新待賢門院藤原康子にて、嘉暦三年の御降誕である。されば、天下騒亂の際に、長しさせ給ひて、元弘三年十月には、北畠顯家を具して、陸奥出羽を鎮し、延元元年には、奥羽を發して、足利尊氏を追ふて、西上し、同二年には鎌倉に足利義詮を攻め、同三年には、青野原に、再び尊氏を破るなど、屢々父帝を援けて、戦功をたてさせられた。同四年、吉野に入つて、皇太子となり、其年八月、左大臣藤原經忠の第にて受禪、十月御即位あらせられた。時に御年僅に、十二才であつた。

斯くて只管、賊徒討滅の謀を籌らされたが、南風遂に競はず、終始行宮に在て、叡慮を惱まし給ひ、正平三年には、賊將高師直の爲めに、行宮をも焼かれ、賀名生に遷幸せらるゝに至つた。其後同六年、尊氏、直義の不和に乗じて、一度は男山に遷られ

たが、間も無く義詮の反する所となつて、官軍利なく、尋いで、賀名生に、遷幸せらるゝの餘義なき有様であつた。斯くて、正平九年には、天野山金剛寺に行幸ありて、久しく留まらせ給ふたが、同十四年には、天野山より、當山觀心寺へ遷られ、後、住吉の行宮に行幸ありて、同二十三年花咲く三月十一日、同所に於て、崩せられ給ふた時に御壽四十一才、後當寺に葬り給ふたのである。

今此の陵畔に立てば、此の君が、御幼少の御時よりして、賊徒討滅の爲めに、東奔西走し、常に大御心を勞させ給ひて、其の皇居さへ定まらず、恨を千秋に残して、崩御あらせられた、御心の程が偲れて松の梢を渡る風の音も、枝に飛び交ふ鳥の音も、只々其上を吊ふ聲とのみ思はれて、悲憤の涙が止め度なく下るのである、心ある人は必ず此御陵前にぬかづいて、此君の御英靈を長へに慰め奉るべきである。

因に、後村上天皇、觀心寺を、行宮とせられ給ひし時、賊勢熾にして、叡慮殊の

外惱ましく、食も進ませ給はず、玉體日に衰へ給ふたので、當山の寺僧等は、憂慮の餘りに「寒晒粉」を製して、すゝめまいらせしに、大に嘉賞し給はれた。之れより數百年、今に至る迄、猶製造を續け、當寺の名物として、世に出して居る。

南 妣 庵

觀心寺の北數町、字宮谷を越へて、木の間に隠れに、民家の點々たる僻地が、東條村大字甘南備の里で、此處は、楠公夫人が隱栖の草庵、南妣庵の有つた處である。

楠木正成の奮忠事歴に就ては、既に世に明瞭で、三尺の兒童も尙熟知して居るが、正成をして、常に後顧の憂無からしめ、且つ、遺子正行等の教養に盡せる、楠公夫人に關しては、世に傳はつて居る事蹟が甚だ少ない、其の系圖の如きも、或は、萬里小路宣房の、女子滋子にて、上田兵庫頭の養女となして、楠氏に嫁せしめしと説き、或は又、大和越智將監の女で、薄三位以隆の養女として、遣はされたと論じ、尙又、

當地甘南備矢佐利の豪族、南江氏の女、久子の方であると、云ふ者もありて、未だ史家の間に異論がある。従て其の終焉の地の如きに至つては、大方忘れられて、之れを究むる者は極く稀れであつた。遇々、東都の士織田完之氏、甚だ之れを遺憾として、南河内に遊び、甘南備の地が、夫人の出處にして且終焉の地なるを確め、同氏の知己加藤鎮之助氏の感奮と援助とを受けて、同地關係者と熟議を遂げ、久しく寒草の裡に、埋没せる楠公夫人終焉の地を、保存する方法を立てた、時恰も大正二年二月であつた。之れと同時に、二條公爵を會長に仰ぎて、南妣庵保勝會の設立を爲し、其の會の事業として、墓碑の建設と堂宇の建立と、併せて夫人傳の刊行とを爲すに及び、漸く楠氏夫人の事蹟と、終焉の地とが、世に喧傳せらるゝに至つたのである。其等の研究に依れば、夫人は、當地甘南備矢佐利の豪族、南江氏の女で、兄は南江兵庫助正忠と云ひて正成の湊川戦死に際し殉死せる忠臣であつた。夫人は名は久子、元享三年、二十才

にして、楠木正成に嫁し、ついで正行外數男の、母となつた。

夫君戦死の後は、只管、愛兒の教養に勤めたが、正行の四條驥に、討死にするに及びては、甘南備の里、字峯條の山上に一地を卜し、観音堂を建て、此處に些やかな草庵を結びて隠栖し、自から敗鏡尼と號して、南朝の興隆を念すると共に、楠家累代の菩提を弔ひ、正午十九年七月十七日、壽六十一にして、此處に示寂した、後、観音堂の南崖に葬り、五輪塔を建て、諡號を、南妣庵玉山蒲圓大禪定尼と號した、と言ひ傳へて居る。

南 妣 庵



今は些やかな石碑と、小堂とがあるのみであるが、目下本堂の新築中であるから、其の落成の後は、面目を一新して、莊觀を極むるに、至るであろう。此れに參詣するには、觀心寺の西より、裏に廻りて、北するが、都合が宜い。

龍 泉 寺

此の寺は、南妣庵より北へ十數町、東條村の西方に聳ゆる嶽山の、東南山腹に在る。今は眞言宗古義派の名刹で、牛頭山醫王院龍泉寺と、號して居る。

寺傳には、推古天皇が、蘇我馬子に命じて、佛法弘通の爲めに、此處に一字を、創建せしめらしが、此の寺の起原を爲せると、傳へて居る。超へて、弘仁十四年、偶々弘法大師、此地に來つて、牛頭天王の靈感を受け、終に此處に留錫して、善女龍王を祀り、辨財天を勸請し、再び精舎を建つるに至つた。これより法燈頓に輝きて、天長五年には、正三位、中納言冬緒を奉行として、勅願寺とせられたが、其後年を経ると

共に、再び衰頹し、正平年中には、兵火に罹りて、堂塔悉く、灰燼となつた。尙其後幾度かの兵燹に罹りて、甚だしく荒廢し、今残れる舊き建物は、寛文年中の再建に係はる、堂宇があるに過ぎざるに至つた。

本尊は薬師如來の木像で、御丈一尺五寸、聖德太子の作と傳へて居る。此の本尊を祀れる薬師堂の、左右前の兩側には、往時の東塔、西塔の跡が残つて居る。その左で、後方の山近くには、雨井戸がある。これは、俗に弘法大師が、八大龍王を、此の井戸に、勸請して祀り、其の上に、磐石を覆ひて、修法せしと言ひ傳へ、旱魃の日に、之れを祈禱すれば、必ず靈驗あると、専ら傳へて居る。

當山の鎮守として、祀れる牛頭天王社は、廣潤なる境内の一隅に在る。これは、式内の舊社、威古神社のことで、彼の姓氏録に「神八井耳尊は、河内皇別、紺口縣主の祖にして、紺口縣主の其の祖神を、祭りしものなるべけれども一たび龍泉寺の鎮守と

爲るに及びて牛頭天皇と稱し、遂に古へに復せず」とあるはこれを指したものである。因に、龍泉寺の北方、東條村大字上佐備の東に、佐備川を隔て、中山の寨と呼べる、寨地がある。

又字中佐備の入口にも佐備谷口の寨址がある。之れらは孰れも、正成の千早籠城の砌、構築せしと、言ひ傳へ居るものである。

嶽山 城址

嶽山は、東條の西方で、彼方村との境界に在り、所謂嶽山連山中に、嶮然雄姿を聳てる山で、海拔一千餘尺、河南要害地の一である。されば古來屢々、城寨として利用せられ、楠木正成の千早籠に城際しては、此處に城廓を築きて部將佐備氏を寄せて、防禦に當らしめ、降て、正平年中には、楠木正儀、和田正武等亦此處に據り、其後、寛正四年に至つては、畠山義就も亦氏の城に籠り、南隣の金胎寺城と、相呼應して

甘山に據れる同族政長と、雌雄を決せし事など、既に古史の傳ふる所である。

此の山上には、今も插鉢形に凹める、所があつて、正平の昔、楠木、和田の兩將、此中に一部の兵を籠め置き、敵を謀つて戦ひしと言ひ傳へ、現に「千人隠れ」の名で呼んで居る。而して古來數度の戦ひには、此の城の東南に當りて、山の中腹に在りし龍泉寺の僧坊を、利用せられて居られた事は明かな事實で、其の爲に、嶽山城を、一に龍泉寺城とも呼ばれて、居つたのである。

千人隠れの東を、五位山と稱し、其の上方を、今も「大鼓掛」の地名で呼んで居る。此處は、楠氏防禦の折、松樹の幹に、陣大鼓などを掛けて、東方諸寨との、相圖をなせし址だと言ひ傳へて居る。

此山頂は、眺望頗る佳なる所で、登山又容易であれば、登臨して風光を賞し、且つ住時の諸戦を懐ひて、一日の清遊を試むるには、至極好適の地である。

延命寺

延命寺は、三日市の東方、彼れ是れ二十町余りで、川上村大字鬼住に在る。途は三日市よりするものと、觀心寺の前から、山阪を超へてするものと、此の外に、觀心寺街道の途中から、大字葛野を経て、するものとの三路がある。

當寺は、南は山、北は細溪に沿ふた、高燥の地に建てられてある。山門を潜つた突き當りの正面は、毘沙門天を祀れる、護摩堂で、之れに近接して、南面の本堂がある。本堂に安置せる本尊は、木彫の如意輪觀世音の座像で、丈け三尺、當山第二世、蓮體和尚の發願に依り、運長に作らしめしと、言ひ傳ふるもので、軀中に、二寸八分の、小如意輪觀音像が、納められてある。此れより西南方一帶の丘陵には、釋迦堂、辨財天堂、經藏、鐘樓、寶藏、求聞持堂、寮舎などが、それからそれと、取次に建て列び、其の間には、幾百本の櫻楓か、体裁能く植付けられ、それに常緑の松樹か點綴して

春秋の眺めは嘸と首肯かれる。庭園の北側一面には、客寮、を始め、庫裡、布教場其の他の建物が、ぎつしりと建て込めて居る。

釋迦堂に安置せる本尊の、厨子入木造釋迦如來立像は、當山諸佛像中の、第一の傑作であるが、これは、前に述べし、古市町の巨刹、西琳寺の本尊佛であつたのを、同寺廢寺の際、當山住職、照邊和尚が奉請して、此處に安置したのである。此の尊像は、世に龍光瑞像と稱へ、三國より傳來せると傳へられ、現に國寶の指定を受けて居る、優秀の作である。

鐘樓に吊るせる梵鐘は、直徑二尺三寸、高さ三尺八寸、銘に「元祿十三庚辰年八月朔日、鎔鑄當寺開山比丘淨嚴、幹縁比丘祥光、冶師、同郡上田村田中徳左衛門宗秀」の刻文がある。

當寺の本堂を始め、寶藏、經藏、鐘樓等は、孰れも元祿時代に、建立せられた、其

のものである。

當山現今は、眞言宗、山城國仁寺和の末寺である。

當寺の縁起によると、往昔僧空海、此の地に、留錫して、坊舎を創建し、寶幢寺と號せしに、創まつたのであるが、何時の頃にか、廢頽して、年久しく中絶せられて居つた。然るに延寶五年に至り、淨嚴と云へる高僧出て、舊蹟を縁として、此處に僧坊の再興をなし、寺號を藥樹山、延命寺と改稱するに及び、面目を一新するに至つた。これが、現今の寺の興りで、淨嚴は實に中興開山である。其の後は、碩徳高僧が相續いて、當山に入りて、頗る宗風を擧げ、爾來法燈相傳へて、今に至つたのであるが、中興よりは、未だ二百數十年に過ぎない。

中興開山淨嚴は、俗姓上田氏、字は覺彦、父を道雲と云ひ、寛永十六年、當地鬼住に生れた。幼より聰慧にして、喜んで佛號を誦し、長ずるに及びては、葷羶を食せず

父に出家を請ひ、十歳の時伴はれて、高野山に登り、悉地院の雲雪阿闍梨うんせつあじかりに就きて、
 薙髮ちはつし、覺彦坊雲農と號して、専ら佛學の蘊奧うんのうを極め、後淨巖と改めた。既にして高
 野山を辭し、河内に歸り、當地に如晦庵じくわいあんを建て、又は泉州に高山寺を創め、尙又、攝
 州には妙法寺を興して、専ら教法を説いて居つた。やがて仁和寺にんなの門主性承一品親王
 は、淨巖の學徳高く、戒律かいりつの嚴淨げんじやうなるを、賞あでさせられて、藥樹山延命寺の、寺號を
 授け、ついで、仁和寺別院とせられた。其後元祿年間、淨巖江戸に上るに及び、將軍
 綱吉を始め、柳澤吉保の、歸依を受けて、湯島ゆしまに寶林山靈雲寺れいうん創めた。其の爲めに、
 當山の守護は、法第れんたいの蓮體れんたいに任せ、後、年六十四才にて江戸に示寂しせきした。淨巖じやうこんは戒行
 圓滿にして、道徳一世に高く、僧俗を問はず、貴賤を論せず、其の徳を慕ひて、法を
 聽くもの頗る多く、眞に一代の碩徳であつた。

當寺の寶藏には、佛像を始め、佛畫、法器、古經、古文書等四百點の多きか、收め

られてあるが、中にも聖徳太子の筆と傳ふる、絹本著色、兜率天曼茶羅圖さそつてんまんぢらは、次の寄
 進狀を有するもので、現に國寶である。

聖徳太子御筆都率内院曼茶羅 一幅

右雖爲希代靈寶、依先師賢淨與淨巖和尚、有夙契奉納藥樹山延命寺寶藏畢

寛永六年己丑二月二十七日

山州牛尾蓮華院先住快立 印

河州錦部郡鬼住蓮體律師

三 日市驛

昔の三日市驛は、今の三日市と上田うへだとの、兩地を指せるもので、此處は、京師、浪
 華より、高野詣での、通路に當り、交通頗る頻繁ひんぱんにして、路の兩側には、旅館、商家
 軒を並べて、往時は頗る繁華の地であつたさうである。

名所圖會に「京師難波よりの高野街道なり、旅舎多くありて、日の斜なる頃より、出女の目さむるばかりに化粧して、河内縞の着ものに、忍ぶ染の拖襦美しく、往かふ人の袖引、袂をとめて、一夜の侍女となる事、むかしよりの風俗とかや」とあり又、三十三所圖會にも、昔の様を述べて「三口市は、京師浪花より、高野詣での通路にあたり、旅店數多ありて賑はし、夏日には、大峯入の法螺の音に、出女の晝寢をさまし、泊りすゝむる聲々の、色を含みし厚化粧に、護摩酢の過ぎた新客は、行場の誓ひも、打ち忘れて、精進落すもありぬべし」とあつて、當年の繁榮の様が、有りくゝと偲ばれる。

錦溪温泉

錦溪温泉は、三口市の中程で、三口市川の清流を控へ、往還より稍々奥に入り込んだ西側に、宏壯なる層樓と、蕭洒な平屋建の客室とを、建て列べてある。庭園には老

樹繁り、泉石の布置頗る趣きがある。浴室の設備は大ならされども、亦蕭洒にして能く整ふて居る。鑛泉は、食塩の冷泉で、此處より十數町西方の、同村大字小塩に在る鹽阪の岩罅から湧出せるを、一條の樋管で導くのである。

合くは、油屋旅館の名によつて、夙く世に知られ、文久の志士伴林光平、天誅組の諸烈士等も、此處に訪づれた事があつた。又近くは、明治二十二年、故小松宮殿下も、御來浴あらせられた。錦溪温泉の名は、其砌、殿下の御命名によるとの、ことである。此の近傍には、杖を曳くべき、河南の名跡も尠なからざれば、都人士が、紅塵の地を捨て、此處に一浴し、日頃の勞を慰むるには、至極好適の場所である。

石佛城址

此の寨址は、三口市から高野街道を、南へ進むこと數十町、石佛村の西南に當つて聳ゆる山で、土地の人は、城山の名で呼んで居る。山は嶺然孤立し、四方の諸峯とは

深谷を以て隔たり、只僅かに、一段と低き馬脊の如き一條の峯で、他の一峯に續いて居る。山頂は眺望頗る好く、西北方の一面は、金胎寺、烏帽子形山の兩寨址とは、呼へば應へんとするの形勢を有し、紀州方向より來襲する敵を拒止するには、蓋し、戦路上の重要な一地點をなすものである。傳へには、元弘の昔、楠木正成これに築城して、紀伊の幕黨に當らしめたと、言ひ傳へて居る。

紀見峠と天見

紀見峠は、本郡の南境を劃する山脈中の絶嶺で、古來紀伊に通する最も重要な交通路に當り、常に、高野詣での旅客が、嶮難の場所の一に數へたる處であつたが、近頃高野電車の開通があつからは車中に座して行かれる様になつた。峠は標高四百三十八米突、近くは紀の川の碧流を控へ、遠く高野の諸峰に對し、遠眺近矚、稀れに見る雄大の風光である。峠の東方に、旗尾の寨址がある。此處も、其の昔、大楠公が、

紀州方面に對する、千早城寨の側面防禦として、城寨を構築せる處と云ひ傳へて居る。天見は古への安滿見で、高野街道の要路に當り、峠から北方數十町に位する。元弘三年正月、紀の幕黨隅田氏の一族が、紀見峠の天嶮を超へて、河南の地を襲ひ甲斐庄安滿見に進出した。此時楠氏の支隊が、之れを天見に迎撃して、幕徒井上入道、山井五郎等五十餘人を斃した事が、古史に傳へてある。兎に角く、紀見峠に源を發して北流する、天見川の溪谷は、紀河兩國の交通路に當りし爲め、古來屢々戰鬥の行はれし土地であつた。

加賀田神社

此の神社は、加賀田村大字加賀田で、三日市から南加賀田に通する道路の東側の、小流を隔てた山の半腹に建てられて、遠方からも能く認めらるゝ社である。

本社創建の年月は、不詳であるが、口碑には、往昔宇佐八幡を勸請せるもので、豊

臣家の奉行、増田右衛門尉長盛の尊信厚く、田地の寄進もあつた。現今の社殿は、元祿年中^の建營に係はり、規模小なるも輪奐^{りんくわん}の美がある。本社殿には、應神天皇、仲哀天皇、神功皇后、素盞鳴尊、菅原道真の、五神を祀り、尙境内には攝社末社がある、本社の背後に當れる山脚には、恰も婦人が、側面向きに坐して、片袖を半ば前に上げた様な恰好の一尺許りの自然石があるが、土地の人は之れを「山の神」と稱して信仰して居る

大江修理亮遺跡之碑

加賀田神社の西方から、小流に沿ふて十數町進むと、右方の山腹に當りて、大江宙太郎氏の邸宅が見ゆる、其の邸内に、大江修理亮時親遺跡之碑がある。

大江時親は、大江匡房七世の孫で、兵法に精通し、武藝に勝れ、尙且學徳高くして自ら隱君子^{いんくんし}を以て任じて、此地に隱栖して居つた人である。楠木正成年十五歳の、延慶二年より十有五年の久しきに亘り、日々觀心寺の中院より、此處に來つて、時親に

師事し、三世の忠を抽^ひつべき、素要を養つたのであると云ひ傳へて居る。

時親の末裔と稱せらるゝ、當主寅太郎氏は、斯かる由緒の遺址が寒草の裡に埋没せるを慨き、先年有志の賛同を得て、一碑を建設するに至つた、其の碑石の篆額「徳不孤」は大山巖公の書、碑文は次に掲ぐるもので、九鬼隆一男の撰である。

(大江修理亮遺跡碑)

自古英豪之士、撥亂反正、克奏回天之功者、雖由資質之超群、抑亦師授父訓與有力焉、元弘之忠臣楠正成、所以擁護鳳闕、三世効匪躬之節者、實在此矣、按史、大江修理亮時親、即博士匡房七世之孫、而廣元之裔也、生於河內加賀田郷、繼紹父祖之業、精通文武、尤能究韜略之術、嘗延慶二年、海内將多事矣、正成年十五、師事修理亮十有五年之久、徃學不倦、修理亮亦能諄諄訓授、遂傳元朝已還之兵法、至使正成忠良無雙與天日爭光矣、蓋正成雖不出世之器、無師授父訓、何能至此、修理亮之功、豈不亦偉

乎、河内人大江延次郎、修理亮之遠裔、慨遺跡頽廢不顯于世、欲樹碑其郷加賀田以圖不朽、來需文於余、余嘉其舉有功於名教、乃叙其略、云爾。

碑の傍に寶庫を設け、刀劍、佛畫其他が藏せられ、猶十數坪の同氏の庭内には、數百年の春秋に堪へたる、下垂櫻の一株が、今に榮へて居て、これを楠公の手植とも、時親の遺愛とも傳へて糸櫻の名で呼んで居る。

岩湧寺

加賀田村の最南端、字上の組の里から、山道を登ること、約二町許りで、大門址と呼ばれる、稍廣い平坦な處に出る。

今は其處に石垣の址が、半ば壞れたる小祠の中に、石地藏が立てるのみで、山門のそれらしき面影は、何も残つて居らぬ。

此處からは、路愈々險難にして、行くこと十八町餘りで、岩湧寺の境内に入る。境

内直前の、左側に寄りて「一の瀧」「二の瀧」と呼べる二の瀑がある。其の高さ各十數丈、水は清くして、岩面削るが如く、眞に幽邃の地で、只滔々たる飛瀑の音を、聽くのみである。

瀧に降つて、俗に臥龍洞と稱へ居る岩窟が、路に向つて口を開いて居る。これは、巨巖の裂罅の大なるもので、眞の洞穴ではない。今此の中には、一基の輪塔が安置してある。

此の洞窟の前の、老樹天を覆ひて晝猶闇き、別天境を抜けると、當寺の本堂に達する。本堂は藁葺き屋根の、江戸時代の建物で、堂内の中央には、十一面觀音像を祀り左右に、役小角十八歳の木像と不動明王の木像とが、安置せられてある。此處の本尊は、弘法大師の作と傳へて、御長け一尺五寸許りの、刀法優秀なる靈像であつたが先年盜難に罹りて、今あるものは、名もなき佛師の手になれる凡作である。

本堂の斜前には、豊臣秀頼と淀君とが、寄附せると傳ふる多寶塔が建てられ、其の塔内には、大日如來の木像が安置してある。

塔の背後にある假鐘樓には「天保九年歲次戊戌冬十一月穀旦再治」の銘ある、高さ三尺五寸許りの梵鐘が吊るされてある。

本堂の前から稍々右前に、頗る急峻な阪路をもつ、二町許りも攀つと、全山の悉くが、大小の岩石を以て成る、山の一突角に出る。其の絶壁の一角に行者堂が建ち、谷を隔てた南方には、紀の國との境界をなせる岩湧の連山が、聳立して居る。此の附近一帯の懸崖には、一面に石楠木が生へて居て、花の頃はさこそと肯かれる。

當山は寺傳によると、文武天皇の勅願に因て、役優婆塞か開基せる、古刹であつた斯くて歴代の歸依淺からず、俗界を遠く離れた此の仙境には、伽藍聳立堂塔建ち、香烟白雲に化して、法燈輝き、中頃には、近江膳所藩主本多主膳正の、祈願所に當てら

れて居つたが、後ち何時とはなしに頽廢するに至つた。

古くは、天台宗京都東山若王寺末に屬して居つたが、今は古野の極樂寺の兼住する所となり、纔かに寺守りか堂宇を護るのみで、徒らに、廢頽するに任せてある。

此處は、三日市を距る約三里、交通こそ甚だしく不便であるが全く俗塵を離れた、高燥閑寂の別天地である爲め、文人墨客の滯留するには、至極絶好の地である、殊に近來、大客殿の新築成り、加ふるに寺守りの懇ろなる待遇があるので、暑夏の候には境内の滔々たる飛瀑に浴し、溪流の河鹿の聲を聴く避暑客は、漸く其數を増すに至つたさうである。

烏帽子形神社

長野町から南へ十數町、三日市村大字喜多の西方に當りて、蜿蜒たる南北に及べる丘陵が、烏帽子形と呼べる山で、其の東方の半腹に、烏帽子形神社がある。

此の社は應神天皇、仲哀天皇、此の他二神を祀れる郷社で、社後に正成が築城せし

當時、城の鎮守として、尊崇せし宮であると、言ひ傳へて居る。

現今の社殿は、元和三年の頃、當國甲斐庄兵衛尉橋正保の建營に係はると、傳へられ居るもので、梁行八尺、桁行二間許りの小社であるが、丹青の華麗な、檜皮葺きの社殿である。末社には、高良明神社、稻荷神社などの社殿が建ち並び、後方は楠氏の古城址を背景として、境内廣濶、老樹は鬱蒼たる、森殿の靈地である。

本社殿の前方に當りて「楠公武威之松」と呼べる老松一幹、枝を垂れて繁茂し、其幹の本には、大和賀名生の堀重信が書ける、自然石の一碑が建て、ある。此の松は、楠木正成の手植として、口碑に残れるものである。

尙當社の境内には、釋迦と聖觀音とを本尊とせる、德壽院高福寺と云ひし古刹があった。其の昔、正成の如きも、此處に大磐若經の轉讀を行ひし事などもあり又後村ト天皇吉野に賊難を避け給ひし砌、當寺の梵鐘を持ち運ばしめしと言ひ傳へ、其の梵鐘は、今も賀名生の堀家に家寶として傳はり、銘に、河内國高福寺鐘、康永元年八月、

楠氏奉獻の由來を、勒されて有るとか聞き及んで居る。此の寺は、明治初年迄は、存立して居つたが、神佛分離の際廢寺となつて、今は纔かに、堂宇の遺址と、『大乘妙典塔、享保七年』の刻銘ある塔石の缺損せる一部分が、境内の一隅に、轉がつて居れるに過ぎない。

烏帽子形城址

烏帽子形神社の背後の丘陵で、其の北方は削れるが如き斷崖をなし、西方亦急峻で登攀し難く、纔に東方の一方のみが、斜面緩かにして登り易く、俗に此の方面を大手口と稱して居る。

此の城は、元弘の昔、正成の一支城として、構築せしに創まり、後、楠木正儀和田正武等も、此の城に據て、北軍に抗し永祿の頃には、碓井大和守定純、同因幡守定阿等亦此に在つて、島山氏に屬した、降て慶長の末には、甲斐庄喜兵衛徳川氏に隸して此地方を領有し、此處を居城として居つたが、後、廢城となつたと傳へて居る。

頂上は、東西約四十間、南北約五十餘間の平坦地で、俗に本丸址と呼んで居る、此處には、俗に經塚と呼べる圓形封土の、圓塚があるのみで、此の他には當年を偲ぶ何等の遺跡も無い。此頂上は、四季の眺望甚だよく、登攀して、颯々たる杉籟に、當年を懷古するも亦妙である。

此の城址の東方に當れる、字喜多よは、山麓は近く上星塚、下星塚、狐塚等の名ある小古墳が、次ぎ／＼と現存して居る。

西代神社及本多伊豫守陣屋址

長野町から、天野街道を西すると、大字西代の中程に小學校があつて、其の向側の古松老杉の蔭鬱として居る森が、西代神社の境域である。

此の神社の創建は不詳であるが、今は、國常立命其他四座の神を、祭神とせる本社と、此外に末社とがある。當社には、近世此地を領有せし、本多伊豫守の、正徳六年

の奉納に係はる、神輿、矛、手洗鉢等が、現存して居る。

當社の馬場先きより、稍東北方に當れる小丘を、俗に陣屋趾と呼んで、其の昔、本多伊豫守の陣屋を設けし故地として言ひ傳へて居る。

高向王の墓

西代の南方約十數町、大字上原の西方に連れる、一帯の丘陵に接して、周圍略三町高さ十數間の圓塚があつて、傍には松柏の老樹が繁茂し、又近くには八幡宮を祀つてあつたが、近年に至りて其の森は伐採せられ、宮は西代神社に合祀せられて、其址には纔かに圓塚のみが残つてある。傳説には、これを用明天皇の御孫、高向王の墓として、傳へて居るが、元より詳でない。

因に、隣村高向村にも高向王の墓と、言ひ傳へ居る、圓塚が、現存して居る。

塚元の古墳

上原の西南に當りて、天野街道の路傍に沿へる圓塚を、俗に塚元ツカもとと稱して居る。此の塚の封土の上には、數百年の星霜を経たる、老樅一株あつて、これに藤蔓ふぢづるか纏繞して居る。塚の下部の、南寄りの一部に當り、東面せる横穴よこあなか設けられ、其の内部の周圍は、石を以て疊み、其の濶さ約二坪、佛體を彫刻せる數基の石碑が、並んで居る。

金剛寺

當寺は、河南の西南隅、天野村大字天野山あまのやまに在る巨刹で、長野の停車場を距る纒かに一里余、路は至つて平坦で、參拜頗る容易である。

河内名所圖會に、當山の形勝を記して、『前には流れ清く、後には翠巒すいらん高く、鐘磬しやうけい白雲に和し、松聲寶閣をめぐり、春は梅匂ひて鶯の初音谷はつねに飴こまし、秋は千岩の水に月澄みて、林葉北風くれないは紅なり、實に終南山しゆうなんざんの翠微寺すゐいに比して、杜詩とは山水の絶勝と書れしは、此靈境とも云ふなるべし』とある如く、背ろに翠緑の天野山を負ひ、前に潺々せんくたる

天野川の清流を控へ、境内には堂塔いづかを並べる間を、千年の古木點綴てんてつして、枝に颯々の響きあり、尙且稀れに吐鵲とくじやくの啼くを聞くに至つては、眞に塵界を離れし、淨境である。

天野街道より右折すると、總門そうもんがある。これは普通東大門と呼へる門で、梁行二間桁行四間四尺、運慶うんけい作と傳ふる金剛力士の像を、其の左右に安置してある。此の門を潜ると、天野川の溪流が流れて、其上に總橋と名付くる欄橋らんきやうが、架けてある、川を挟んだ東西の兩側は、當山隆昌の其の昔、薨を並べし坊舎の跡で、今は其の大方は廢滅に歸して、只纒かに、當年の遺跡を窺ふに過ぎない。

總橋を渡りて左折し、中院の前より尙歩みを南へ運ぶと、堂塔を圍める粉壁いんぺきの一廓があつて、其の東口に樓門の高く聳えて居るのが見ゆる。之れが即ち當山の入口で、樓門は三間一戸、屋根は入母屋造いりもぢやう、本瓦葺きの、特別保護建造物の指定ある建物である。其の樓上には、後白河法皇の御宸翰『金剛寺』の勅額ちよくかくを掲げ、樓の左右には運慶作と傳ふ

る、毘沙門、持國の二天像が安置してある。

樓門を這入つた右側の建物は食堂であつて、梁行三間四尺餘、桁行八間四尺、内に文珠菩薩の木像が安置せられてある。これは、正平九年十月、後村上天皇吉野の行宮より當山の塔頭摩尼院に行幸あり、其後全十四年十二月觀心寺に遷らせ給ふ迄、六箇年の久しきに亘つて當山に留まられたる御時此の食堂をば假の政廳となし、楠木正儀、和田正武等をして、常に軍議を凝さしめ給ひし、世に天野殿と稱する、由緒ある建物である。之れに正對する處に、放生地と呼ぶ小池があつて、當山の鎮守、善女龍王辨財天、天照太神を祀れる小祠がある。

此處から數階の石段を登つて、上段の地區に上がると、向つて右に金堂と鐘樓、左に多寶塔と經藏とか、相對して建てゝある。金堂は梁間七間、桁行七間、屋根は單層入母屋造、本瓦葺きの建物で、承安元年 後白河法皇の御建立に係はる。其後慶長十

年に至て、豊臣秀頼の修繕あり、更らに元祿十三年には、徳川綱吉の修築行はれ、今は特別保護建造物である。此の堂内に安置せる本尊は、木造大日如來坐像で、御長け八尺、脇士は降三世明王坐像と不動明王坐像とで、各長け五尺五寸、三體共に彫刻の技、頗ぶる優秀にして、運慶の作と傳へ、現に國寶である。又金堂内に安する三尊圖像なる、絹本著色の一幅も、同様國寶で、明治三十四年には、國費を以て修繕が行はれたるものである。

多寶塔も其の建立と修繕とが、金堂と全く同時に行はれ、其の大きき方三間、二層屋根椽瓦葺きの建物で、今特別保護建造物である。此の堂内には、春日佛師の作と傳ふる大日如來の木像を安じ、四面の鏡板には、狩野正信の筆と稱する、雲龍の畫が彩られてある。

尙多寶塔の廻廊の擬寶珠には、豊臣氏の修築を物語れる次の、『天野山金剛寺寶塔、

奉内大臣豊臣朝臣秀頼公御再興釣命、慶長十一年三月吉日、御奉行、森島長以の刻銘がある。尙又當寺伽藍の、五佛堂、大師堂、高野明神社の建物も、悉く秀頼の再修せる所にして、其れ等の擬寶珠には、略大同小異の銘がある。其の刻銘に依りて、慶長十年及十一年に亘り、片桐東市正且元、吉田次左衛門保好等か、奉行として當寺の修築を行へると、此の間に秀頼が、内大臣より右大臣に昇進せる事などが認められて甚だ興味がある。

鐘樓は桁行三間、梁間二間、重層袴腰、屋根本瓦葺の建物で、後に記す所の御影堂、觀月亭など、共に、之れ又特別保護建造物の、指定ある建物である。

再び數階の石段を登つて、更らに上層の疆域に進むと、藥師堂、五佛堂、御影堂、觀月亭、護摩堂の建物が、次ぎ／＼に建て列び、尙藥師堂、護摩堂の背後には少しく距たりて、求聞持堂、開山阿觀僧正覺心法印の廟、持明院上皇御納骨所、法光太師

廟などがある。

藥師堂は、天平年中、聖武天皇の勅願に依り、僧行基の草創に係はるもので、本尊の藥師佛は、御長け五尺、僧行基の作と傳へ、又、日光、月光十二神將の像を安置してあるが、此等の諸像は孰れも、稀れに見る優作である。

五佛堂は、一つに、三寶院と稱し、梁間桁行共に三間の建物で、傳春日佛師作の五智如來の木像を安置し、此の堂の背後には、弘法大師の加持井がある。

御影堂は、梁間四間、桁行四間、單層屋根寶形造、檜皮葺の建物で、眞如法親王の御筆なる、弘法大師の眞影を安置し、脇士は不動、愛染の兩明王木像にして、作者は運慶と傳へて居る。

此の堂の東面に當れる觀月亭は、今を距る凡五百五十年前、後村上天皇、當山に風輦を駐めさせ給ひし御時、觀月の臺として、建てさせ給へる建物で、桁行南側一間、

北側二間、梁間一間、單層屋根向唐破風造、檜皮葺きの小臺である、之は天皇が御徒然の折は、時に觀月を遊ばされた所ると傳えられてある。仲秋明月の折などは、彼の御遺愛の琵琶を弾じつゝ、此山奥にて御心を澄まさせ給ひしかと思へば、彼の爲忠朝臣の『君住めば峰にも尾にも宮居して深山ながらの都なりけり』と詠まれたる歌と共に、そゞろに當年の事か、目に見える様に追懷される。こゝから一廊を設けて、直ちに、五佛堂に通じて居る。

求聞持堂は梁間桁行共に約三間、虚空藏菩薩を本尊として、其の昔は、女人結界の處であつた。此の本尊は弘法大師の作と、傳へて居る。

樓門外に立ち出で、天野川に架せる鎮守橋を渡れば、削るが如き高丘が、面前に聳立し、其の上へには、鐘樓、拜殿、本社殿の丹生明神社の建物か、とり／＼に建て列んで居る。本社殿は、丹生、高野、水分の三明神を配祀せる宮で、當山守護神とし

て祀られてある。

此の社殿の前に立て、木の間隠れに當山の全景を瞰下すれば、一入壯觀を覺ゆるのである。

再び金堂の處に戻つて、其の後方から北門を出ると、其の左側は摩尼院、右側に中院、更らに中院の北に路を隔て、吉祥院等の、坊舎が現存して居る。之れ等は往者七十有餘ヶ寺の僧坊中、辛くも廢頽を免かれて、今に残れるものである。

摩尼院は正平帝當山に行幸あらせられてより、六箇年の久しきに亘りて、行在所と定め給ひし、由緒の僧坊である。案内を請ふて、坊内を拜觀すれば、當年懷古の情綿々として盡きざるものがある。

中院に南接せる舊觀藏院は、北朝の持明院上皇が行在せられて、學頭禪惠法印を戒師として、御落飾なし給ひし、之れ亦由緒深き道場であつた。今は其の建物は、頗

る華麗に改築せられて、中院の有となつて居る。
以下當山の縁起を、鈔出ませう。

當山の創めは、頗る古く、夙に聖武天皇の勅願に依りて、僧行基の草創せる名刹である。其後、僧空海此處に留錫するよ及びて、堂塔坊舎悉く備はり、寺觀壯麗を極め、法燈日に輝くに至つたが、四百餘年の星霜を経るに従ひ、何時か荒蕪廢頽する所となつた。斯くて二條天皇の永萬元年に至り、高野山の碩德、阿觀なるもの、高野明神の靈夢を蒙つて此の地に來り、更らに建水分神の示現を拜するに及びて、當寺再興の事を朝に奏するに至つた。此の事あつて後數年、後白河法皇は、高屋朝臣憲貞に勅して、當寺再興の事を掌らしめ給ふた、時に承安元年、紀元一千八百二十五年である。茲に於て、憲貞拮据經營すること數年、金堂、寶塔を始め其他の伽藍と、七十有餘の坊舎とか悉く備はり、更らに法皇より、佛舍利御奉納の宣旨及び金剛寺の勅額を賜はるに及

ひで、再び法燈輝き、堂塔は巍然として雲に聳へ香烟縷々として堂に満ち、眞に天下の偉觀を極むるに至つた。時に八條女院は帝の叡信を感想せられて、常陸國信太莊を寄進し、且嵯峨天皇の皇子眞如法親王の御眞筆なる、弘法大師の尊像を、御影堂に安置せしめて御影供を行はしめ、尙永く之れを恒規とせしめられたので、これより當山を女院高野とも呼ひて、上下の崇敬一層加はるよ至つた。又法皇御再興の縁に依り、法皇の第二皇子守覺法親王の總法務なる、御室仁和寺の末に列せられた。

斯くて皇室の御叡信愈々深く、元弘三年には、大塔宮護良親王より、播州西河井莊を御祈禱の費に賜はり、建武二年には、後醍醐天皇より、東寺傳來の佛舍利の寄進を受け、ついで勅願寺と定められ、尙和泉國大鳥莊を寺領として賜はるに至つた。

正平七年には、北朝三上皇の御幸あり、全九年には、後村上天皇、吉野の宮より此處に皇居を遷され、其後六年の久しきに亘りて當山に駐らせ給ひ、全十四年には當山

の中興阿觀あくわんに法印ほういんを贈叙そうじよせられ給ふた。其の後、慶長十年に至りては、豊臣秀頼、片桐且元に命じて、諸堂宇の修繕を行はしめ、降て徳川氏に至りても、元祿十三年に及びて、亦修補を加ふる所があつた。

斯く皇室御歴代の尊崇と、武家諸將の歸信と、尙又當國の國司等の深き歸依きいに依つて、後白河法皇御再建後、七百餘年の星霜を重ねるも、其の堂塔坊舎は尙宏莊きんさへにして、輪奐りんくわんの見るべきものあつた。然るに維新の際甚たしく廢頽し、幸にも其の堂塔加蓋は尙依然として其儘なるを得たが、七十有餘の僧坊は終に廢滅の難に遭ひ、今は纔かに三院を残すのみとなつた。

其後寺僧の熱烈なる勒行ごんぎやうにより、近頃に至つて法燈再ひ榮え、漸く舊觀に復するの運に向ひつゝある有様である、今寺は天野山、三寶院金剛寺と號して、眞言宗準別格しんげんべつかく本山の寺格である。

斯かる由緒の名刹めいせつなれば、其の寺寶の如きは寶庫に満ちて、茲に、枚舉まいきよするの遑いとまは無いが、中で最も著明のものを紹介するに留めて置くことにした。

諸佛、繪像えいざうの中では、絹本著色虚空藏菩薩像、全五秘密曼荼羅圖、全金堂三尊像等は、孰れも國寶である。此の他、傳宅磨法印澄賀筆不動明王并に二脇士の圖像、中興阿觀の眞蹟兩部種子曼荼羅、中將法如比丘尼が自らの鬢髮びんげつを以て縫はれたる世に中將姫黒髮の曼荼羅と傳ふる釋迦文殊普賢三尊種子像、傳張思恭筆釋迦如來の圖像、傳巨勢金岡筆法華說法像、八條女院の御局禪尼淨覺の寄進に係はる法華講本尊像、傳兆殿ちやうでん司筆法華陀羅尼品像、傳鳥羽僧正覺融の筆大威德明王繪像、傳觀心寺蓮金院長存の筆十二天圖像、傳讚州善通寺增蓮僧正の筆八祖大師繪像、傳石山觀賢僧正の筆弘法大師入定出現像などは、其の優なるものである。

寫經には、傳聖武天皇御宸翰金字最勝王經、傳光明皇后の御筆法華經開結と大毘婆

沙論、明惠上人の筆で經の裏には假名文字數通ありて世に賴朝の消息と傳へ居る國寶の寶篋印陀羅尼經、經の裏に和歌數通ありて嘉應二年沙門寂眞と記るせる金字寶篋印經、傳菅公の筆金字法華經、等か著しきものである。

院宣、繪旨武家の書、廳宣、制札の類に至つては、其の數實に夥しく、後白河院已來の歷朝の繪旨院宣合せて三十九通、賴朝以來の武家の書狀合せて四十九通、後鳥羽天皇建久元年以來の廳宣合せて十五通、楠木正成、正行、正時、正儀等の楠氏一族の書翰合せて十四通、徳川家康の書翰制札、及奉書合計數通の多きに及び、若し夫れ中興以來の、眞俗の古記の如きに至つては、其の數約百五十通の夥しきに及んで居る。

以上の外、蓮花蒔繪經營、楠氏一族の所用と傳ふる五領の腹卷（白草威、藍草威、藍革肩白威等）の國寶を始め、後村上天皇の御奉納に係はれる雷神の銘ある琵琶、高麗笛、鳳凰の銘ある笙。靈元天皇勅銘の鈴丸、嵐丸の笙、正成が後醍醐天皇より拜領

せしものにて、櫻井驛にて子息正行に授けしと傳ふる月山作銀鞘の守刀、正成の所持と傳ふる非理法憲天菊水の軍旗、後醍醐天皇御念持の佛舍利、後村上天皇の繪旨の添える東寺傳來の佛舍利、後白河法皇當山中興御願の際、當寺本尊として御寄進せる旨を、認めある繪旨の添える佛舍利、傳弘法大師眞蹟の草書一帖、正行の彫刻と傳ふる長け一尺五寸の楠木正成木像、傳運慶作の地藏菩薩像、傳教大師の作と傳ふる大黒天像、尙此他の木像、大小大鼓、古皮具足、旗差物等の類が、夥しく寶庫に收められてある。

今歴史上の參考となるべき、繪旨と正成の書翰とを二三紹介して置く。

○後白河天皇の金剛寺に天下靜謐を祈禱せしめられしものに

後白河天皇繪旨

爲天下靜謐、殊可致御祈禱之精誠者、天氣如件、悉之以狀、

十二月五日

右 少 辨(花押)

河南の枝折

二四一

金剛寺々僧中

○後醍醐天皇東寺の佛舍利九粒を當寺に賜へるもの、

後醍醐天皇繪旨。

東寺佛舍利九粒、所被奉納當寺也、可令存知者、天氣如此、悉之以狀

十二月廿一日

右 中 辨(花押)

金剛寺々僧中

○後醍醐天皇當寺を勅願寺とせられて皇統の長久を祈られ給へるもの。

後醍醐天皇繪旨

當寺、爲 勅願寺、宜專佛法之紹隆奉祈皇統之長久之由、所被下也、悉之以狀

延元々年十月一日

權 中 納言(花押)

金剛寺衆徒中

○後村上天皇當寺中與阿觀に法印を贈叙し給へるもの

後村上天皇繪旨

當寺本願阿觀贈位事、所被叙法印也、可令存知者、天氣如此、悉之以狀

正平十四年十二月廿一日

權 右 中 辨(花押)

金剛寺々僧等中

○元弘二年當寺に於て戰勝の祈禱あり、其の祈禱卷數を正成宛に報せしに對し、正成より當寺に返書を差出したるもの二通

御卷數給候畢、早可令進覽候、恐々謹言

十二月九日

左衛門尉正成(花押)

謹上、金剛寺衆徒 御返事

祈禱卷數賜候畢、種々御祈念、返々爲悅候、恐々謹言

十二月九日

左衛門少尉正成(花押)

謹上、金剛寺三綱 御返事

などである、尙當寺の所藏『禪惠上人釋論奥書』は重要な史料である。

楠公物見松

後村上天皇天野山に御駐輦あらせらるゝにあたりて、楠正儀等守護し奉りし時、當山を隔る南二十餘町、字高瀬に在る一老松の枝に部下を登せて、敵勢を探らしめたと傳へてそれを楠公物見の松と呼んで居つた。其の老松は數年前迄は榮えて居つたが、今は倒れて僅に其の跡を留むるのみである。此の松の名を、後世に傳へん爲めに、金剛寺境内の南門の傍に、先年斥候松碑を建てられた(碑文略)

大平記に、正平十四年後村上天皇當山より、觀心寺に遷幸の模様を述べて『此頃吉野の新帝は、河内の天野といふ所を皇居とせさせ給へば、楠左馬頭正儀和田和泉正武二人、天野殿に參して奏聞しけるは、畠山入道誓東八ヶ國の勢を卒して、二十萬騎

已に京都へ着て候ひける。

但今の皇居は餘りに淺間なる所にて候へば、金剛山の奥觀心寺と申す所へ御座を移し進らせ候ひて、正儀正武等は和泉河内の勢を相伴ひ、千早金剛山に引籠り、龍泉石川の邊にかけ出て、日々夜々に相戦ひ、湯淺、山本、恩地、贊河、野上、山本の兵共は、紀伊國の守護代塩谷中務に付て、龍門山最初か峰に陣を張らせ、紀伊川禿邊に野伏を出して関を合せて攻寄せ………勝に乗つて追懸け、敵を千里の外に追散し、御運を一時に開べし、是庶幾する所の合戦なりと、事もなげに申ける。主上を始進らせて、近侍の月郷雲客に至るまで、皆たのもしき事にぞ思召ける。さらば聽て觀心寺へ皇居を移し進すべしとて臨幸なるに、無用ならん人々をそゝろに召具させ給ふへからずと申ける間、實にもとて、傳奏の上卿兩三人、奉行の職事一兩輩、護持僧二人、衛府の官人四五輩を召具せられ、此外は何地へも暫く落忍びて、御敵退散

の時を待つべしと仰出されければ、攝政關白大政大臣、左右大將大中納言、七辨八史五位六位、後宮の美婦人青上達部、内侍、更衣、上、女房、出世房官に至るまで、或は高野粉河、天河、吉野、十津川の方に落行て、あさましげなる山賤ごもに、憂身を寄する人もあり、あるひは志賀の古京、奈良の舊都、京白河に立かへり、敵軍の中にまきれ居て、魂と消す人もあり……』とある。主上を始め奉り供奉の官人が、如何許り御困難にあせられしか只管恐察するの外はない。

高向神社

高向村大字高向に在る村社である。記録全く失せて、由緒を明にする事が出来ないが、往昔は『七郷の宮』と稱して、此地方の産土神であつた。祭神は元、素盞鳴命、天兒屋根命、外に三柱の神を合せて五社大明神と呼びて居つたが、近來字日野の八阪神社と春日神社、字上久保の白山神社などを合祀せらるゝに至つた。

境内の一隅で、神社の玉垣の北方に、周圍七八間、高さ八尺餘り、根廻りを石で疊んだ小丘の圓塚がある。今は青苔蒸して、樹木か生ひ茂けり、塚上には多寶塔が建つて居る。此の邊ではこれを高向王の塚だと傳へて居るが、元より確證はない。先年村内の有志か、此の傳説を確めんとて、此の塚を發掘し始めたが、俄かに山鳴り風起つて不思議の靈威があつたので、遂に一同恐れをなして、中止したとの事である。因に、高向王は用明天皇の御孫にて、此の地に生れ給ふたと傳へて居るが、之は不明である又推古天皇の御代、留學生として、り、彼の地の文物制度を、研究して歸朝せる高向玄理も、亦此地に生れたと傳へ、名所圖會の著者の如きも、高向玄理は、錦部郡の人であるが、其の舊址は明でない、載せて居るが、これは地名に依る附會説ではないが、尙研究する必要がある。

觀音寺

瀧城址小

高向村大字日野に在る巨剎であつた、記録の明徴すべきものが無いので、元より草創變遷共に不明であるが、口碑には天野山金剛寺の開基と同時代で、僧行基に依つて草創せられ、其當時は、堂塔伽藍巍々として、頗る輪奐の美を極め居つたと傳へて居る。然るに其の後兵燹に罹つて堂宇灰燼に歸し、遂に昔の隆昌を見るに至らずして漸次衰頽し、今は僅かに一堂が残れるのみで、其の境内の大部分は、田圃に拓かれ、時に布目の古瓦などが、發見せらるゝに過ぎない有様である。

今も寺寶として残れる、本尊の大日如來木像と（丈け八尺許りの坐像）、正觀音立像（丈け二尺八寸）とが、共に行基の作と傳へられて居る。尙當寺の什寶に、大般若經が數百卷あるが、これは南北朝の時、敵味方共長陣の閑に、書寫せしと傳ふるもので其の一卷毎に、將士の名が記されて、あるとのことである。

天野山を南に距ること約二十町、大字日野と瀧畑との境上に聳ゆる、海拔二千餘尺の山頂を、小瀧城址又は國見の城址と呼んで居るが、是れ亦記録の徴すべきものがない。傳説の儘を記すと、此處も楠正成千早籠城の砌、構築せるもので、主として和泉の敵に當る爲めであつた。其後正平年中、後村上天皇が天野殿に在らせられた時も、正儀正武等か、此處に守兵を置いて、守護し奉つたと傳へて居る。所謂此の城址は眺望頗る佳く、今も塹壕の跡らしき處や、陣屋址など、呼ぶ地名が、残つて居る。尙此處から數町北へ下ると、彼の楠正儀の物見の松に達せられる。兎に角く此處は、要害の地には相違ないが、尙後考を待たねばならぬ。

高向村大字瀧畑の人家を出端れて、尙數町南へ進むと、深山幽谷の裡に、廢頽せる寺があるこれが光寺である。長野の停車場からは、彼是れ二里半餘りである。此處から南には、最早や全く人家は、無くて、約一里で河内と紀伊との國境に聳ゆる、海拔

五百五十六米突の峻嶺、藏王峠に達するのである。此の峠へは路は甚だ峻難であるが山岳登山の流行る此頃、此處を越して紀伊の妙寺村に出るのも、藏王嶽が千古斧鉞を入れられざる、天然の儘の峻嶺であるだけ、一日の旅行としては、至極相應しい試みであると思ふ。殊に夏季の候、瀧畑川の河鹿を聞きつゝ歩むは一入の趣味がある。

元此寺は、福玉山と號し本尊は不動明王である。往昔は堂塔備つて、法燈輝いて居つたか、世の變遷につれて漸く衰頽し、加ふるに土地僻遠の爲め一層寂を感ずるに至つて、今は輪奐の觀るべきものも全く無くなつた。

然るに其の縁起は頗る古くて、我が國へ佛法の初めて渡來した用明天皇の御代、然も天皇の勅願に因て、草創せられたる靈刹で、開基は行滿上人である。行滿上人は播州賀古郡の人で、初め和泉の賀補山に來つて、老翁に見へ、其の告げに因て此の地に來り、光の瀧に浴して、佛法の練行をなし、終に瀧の傍に草庵を結び、自ら背負來つ

た千手觀音の尊像と、自刻の不動明王と、練行の際瀧の中から出現せる大蛇によりて感得したと云へる、聖觀音の靈像とを本尊として、堂宇を建て、祀つた。後、上人は横尾山を草創したのであるが、今も上人の廟は當寺に在る。其後役の行者、葛城山修行の日亦此の地に來り、四十八所の瀧と四十八所の岩窟を開き、且法華安樂行品の一品を、寺の境内に納め、其の上に塚を築きて多寶塔を建て、其後、光明皇后當山に行啓あつて、御自ら書寫せる最勝王經と聖武天皇御所持の佛舍利一顆とを寄せられた。斯くて智證大師、栴尾上人、根來寺の興教大師を始め、一代の碩徳等が當寺に留錫せし事も尠くなかつた。後醍醐天皇は當寺の山門に、護國王山の額と別に御紋章とを賜ひ、護良親王は暫く此處に隠れ給ひて、御願成就の法を修せしめらると共に『時を得て、法の燈かけよと、光の瀧津瀬石はしる音』の和歌を寄せられた。此の後、征韓の役に當つて、豊臣秀吉亦、皇國の勝利を祈禱せしめた。此の外武將の尊信厚く屢

々願文を奉つて、祈願をこらすものも多かつたといふことである。

尙境内の一隅には、世に炭焼不動と稱して、著はれたる小堂がある。本尊は空海作と傳ふる、丈け八尺許りの不動明王の像である。其の炭焼不動の由來は、天慶六年三月不動明王が、當時の住持、常操大僧都に、白炭の焼き方を授けられたといふに基因して居る。これから茶席に用ふる白炭を、光の瀧炭とも稱するに至つたのである。其の後。後白河法皇、紀州根來寺へ臨幸の序を以て、當山に立ち寄られ給ふた時、『猶白く、見へぬる今朝は岨かまの上へり積む雪のほのぼの』の御製があつたとも傳へて居る。

境内から山麓につき、瀧畑川の流に沿ふて、二町許り、南へ進むと、所謂光の瀧がある。此の瀧は一つに光明瀧とも稱して其の高さ數丈、水勢鞏々として宛然銀河の九天より落るか如く、飛沫白雲と化し、盛夏尙ほ寒さを覺ゆる位で、眞に壯觀を極めて

居る。此外附近には四十八瀧四十八岩窟の稱がある位で、山中を探せば又風光、頗る奇なる所である

要するに當寺は、全く人宸を離れた仙境であつて、四季折々の眺めも佳であるが、殊に鶯は四時軒近く訪れ吐鶯もなければ、河鹿も聞ゆるのである、それで夏時など滞在するのも頗る面白いこと、思ふ。殊に現時の住職は、磊落な愉快な人で、能く客を遇してくれる。

清崎神社

天野村大字小山田の東南丘に、鎮座せるものにして、往昔より、表筒男、中筒男、底筒男の三神を、祭神とせられて居た。神功皇后、三韓征討のときも、深く此の三神に祈願を籠められ、凱旋の後は、攝津住吉と共に、歸信愈々篤く、豊浦神社と稱せられて居つたが、明治の初年今の名に改められた。

本殿は檜皮葺住吉作で、境内には攝社末社繪馬堂があつて、風致亦頗る佳い。當社には古來神功皇后に關しての、種々なる傳説が傳へられ、皇后凱旋當時の、古式なりと云はる、裸馬駈の神事が、今も行はれて居る、又住吉神社の神輿渡御式に際し、『小山田人足揃たか?』と唱へらるゝも、古來當社より、十六名の神輿昇が送られたるに因ると、傳へられて居る。

四通の大師

西高野街道の一部落、千代田村大字四通に大師寺と云ふ眞言宗の寺院があつて、本堂に大師の像を祀つてある。此の寺の山には、四國八十八箇所に擬して、石佛像を安置し、老松穢松が其間を點綴して風景佳なると共に、毎月廿一日には、附近より信者のこれに詣つるものが多く四通の大師の名で世に現はれて居る。

狭山池

池は三都村領に屬し、高野電車狭山驛より、纔かに數町にて達する事が出来る。此の池の開鑿は極めて、古く日本書記に、

崇神天皇、六十二年秋七月の詔に、『農天下之大本也、民所恃以生也。今河内狭山埴田水少、是以其國百姓怠於農事、其多開池溝以寬民業』とあるに、起因せるもので、次代、垂仁天皇の御代、皇子五十瓊に色入日子命によりて、始めて開鑿せられたる、我國最古の池溝に屬するものである。其後數百年を経て、池底大に埋れたので、天平年間、僧行基出て、之れを修築し、降て永祿年中安見美作守重ねて修し、慶長年中に至りては片桐且元豊臣秀頼の命を受けて更に大修補を行ひ且つ、同十三年より狭山新町の民を以て、樋守と爲し、居宅の租を免せらるゝに至つた。

河内國狭山、天平三年之比、行基菩薩、成池、後堤樋、及大破畢、然處百年以前、安見美作、雖一成池工口有子細、終依不成就、民百姓等及干損、迷惑之旨、秀頼公江致

訴訟、片桐東市正、被仰付、攝津、河内、和泉三ヶ國人夫を以、慶長十三年戊申二月七日、始而此普請取懸、此樋之長六拾間、同二月十六日伏之、普請奉行林又右衛門尉、小島吉右衛門尉外一人(不明)御大工攝州住人(不明)の彫刻ある樋門が現し存て居る。之れに因ても其の當年の様か髣髴せられる。

近く明治の御代に至つても池水漲溢、堤防決壊の事なごあつて其都度忽ちに修補を加へ來つたが、頃者は全く未然に補修を爲すに及んで、漸く決壊の憂無きに至つた、池は東西約五町、南北八町、周圍壹里餘、水面反別三十有餘町の大池で、常に天野川、金熊川等の流注を受けて居る、狭山村大字池尻に二箇の樋を設けて、灌漑と剰水排除とを掌つて居る、西樋の末は西除川となり、野田、餘部、丹南を経て、泉北郡五箇莊村に至りて大和川に合し、東樋の下は東除川となり、菅生、丹比、向野、鳥泉を貫流して中河内郡惠我村明治橋附近にて大和川に入るもので、實に下流五千有部落の、田圃を

濕ほせる唯一の大用水池である、往昔から西樋が屢々破損せるは水神の崇るが爲めなりとて、安政五年に及び西樋に近く、池中に石を積みて、水分大神を祀るに至つた今も其の小祠は建つて居る。

池の三方には遙かに、蜿蜒たる丘陵が繞り水は清澄にして碧く風光が明媚である、特に夏季、山翠にして靜波搖ぐの夜、小舟に月を賞するに至つては、眞に天下の勝地たるを覺ゆるのである。毎年秋冬の頃田圃に灌漑の必要なきに至ると、池中の水を悉く涸らし、池底を浚渫せられる、其の排水に當りて料金を取つて、投網其他の方法で池中の魚類を捕らしむるが、數奇者は遠近より集まり、觀客亦堤上に満ちて、甚だ賑ふのである。池の東南隅に當りて、狭岐の池の名で呼ばれて居る小池があるが、これが此池の出來る最初に、鑿たれたるものとして、傳へて居る。

狭山神社

此の神社は狭山村大字半田はんたの小字を城しろと呼べる高地の半腹に在る、西向の、延喜式しきの社で、天照大神及素盞鳴尊を祀つてある、記録の明徴すべきものがないので、其縁起の變遷が不分明である、近年に至つて狭山新町の氏神なる、牛頭天王ごつを祀れる八雲神社と、池の氏神ある、牛頭天王を祀れる天王社及狭山堤神社さやまづみとが、此處に合祀せらるゝに至つた。狭山神社は元池の東岸に莅める處に、鎮座せる神社で、垂仁天皇の皇子、五十瓊色入彦命いそしきりひこを奉祀せるものであつた。其の社格は式内神社で、既に三代實錄に、『清和天皇貞觀元年正月廿七日奉授從五位下狭山堤神從五位上』とあるがそれであつた。

半田古戰場

南山巡狩録しゅんしゆろくに『延元二年九月池尻半田に凶徒を打破る爲めに佐備三郎左衛門尉正忠馳向ひ合戦を遂ぐ云々』の意味が記されて有る、は即ち此地方の戦を證するものであ

らうか、今も大字半田小字東村の北部一帯の地を、『城』と云ふ名で呼んで居る。此處は後の一方は細徑を以て甘山つみやまと連り、前面は天野川を控へて、西北に狭山池を脚下に瞰下する、景勝の地である。又一説には明應の昔、埴田右近はにだうこんと稱する者の、居城址なりしとも傳へて居るが、其等の興廢に就ては未だ研究の暇無くて、確證が見當らないのを遺憾とする。

狭山陣屋跡

小田原の北條氏は、天正十八年に豊臣秀吉に討たれて滅亡し、相模守北條氏直及弟氏規うじのりは一端高野に入つたが、後豊臣氏、氏規の忠勇を思ひ特に宥ゆるして狭山城主となし一萬石を給した。斯くて慶長五年氏規の子、氏盛其の封を襲いでから、子孫相續して明治に至つたと傳はつて居る。此の北條氏の狭山陣屋の址は狭山村の中部で、狭山池の東岸の北半部から、其の以北數町に掛けて南北約十町、東西四町内外に亘る廣濶なる

地域で、上屋敷と下屋敷とより成つて居る。上屋敷は藩主の邸宅などの有りし所で、現今の小學校の建物の北方約一町、道路の西側に位し、其の背後は濠池に莅んで居る。此屋敷の北門は、現今の高野電車線が街道を横切れる邊りに建ち、之れより南へ一直線に、平坦なる數間幅の道路を作り、其の南端に當つて、南門を建てたるもので、其の道路の兩側一帯に應舍倉庫士人の邸宅が建て並んで居つたのである。下屋敷は今の人家を隔て、其の南にあり、西は狭山池に沿ひ、東は北村に通ずる道路との一帯の地域で、此處には殿舎、競馬場、調練場、下人の屋敷其他が設けて有つた。只今では上下屋敷とも田園と成り、或は民家の邸宅となつて、僅に數軒の古風な茅屋葺きの藩士の舊宅が残れるのみである。

池尻古戰場

『正平二年正行東除にあり、官軍を催す、攝津國和泉國及紀伊國熊野の邊に於て、楠

方の者ども、蜂起なす由、京に聞えしより、細川顯氏を大將として、八月天王寺に着陣し、それより泉州界の浦に向ひ、河内國地尻に於て、楠勢京方と戦ふ』と南山巡狩録にある池尻は、今狭山驛を下車して、狭山池に至る迄の、小字西池尻の一部と、其の南方一帯の高地を、指せるが如くに思はれる、此の處は南は池で、西は西除川に依りて天然の池濠を爲し、東は字浦地の低地に臨み、北は西除川其半を取り巻いて、野田の莊の高地に接し恰も城砦的の地形を備へた、要害の地である。

三都神社

三都村大字今熊に在る。境内は樹木蒼鬱として、眞に好箇の神域である、祭神は本宮、新宮、那智及伊弉諾命應神天皇の五座である。本社は天文十五年の創建で、古くは、熊野三社權現と稱へて、式外の大社であつたが、近年に至つて、今の名に改め、琴平神社其他の社が合祀せらるゝに至つた。何時の頃よりか、當社境内に、寺坊を設

けて、**金藏寺**と稱へ、僧坊十二ヶ寺の多きに及び、其の當時は伽藍整ひて、頗る殷賑を極めて居つたが、應永の末、兵乱に遭ひて社寺領を沒收せられ、其後漸く廢頽する所となり、終に明治初年に至つて廢寺となり、神社のみ残つたと傳へて居る。今も『西の室』『地藏院』『光明池』『門の外』『門の内』等の字名が残つて、往昔の隆昌なりしを物語つて居る。

七 本 松

三都村大字岩室の、西方なる一丘上にある巨松で、古くから七本松の名で呼んで居る、幹は周圍約三丈、地上數尺のところから七幹に岐れて居つたが、其の一枝倒れて六枝となつた、口碑には慶長年間、豊臣氏、狭山池堤修補の時に、植へられたることも傳へ、或は信長人京して後、行路の便を許つて、各處に一里塚を築かれたる際、植へたるものだと云ひ傳へて居る。

野 田 城 址

此の城址は、野田村大字南野田に在りて、一に穂出離山とも呼んで居る。北野田の西方村端れを北に流れて居る西除川の左岸を、川に沿ふて南へ進むた處の、一丘陵がそれである。現今は城址の中央を、高野電線が稍斜に通つて居る。此處は東の方が西除川の溪谷に因つて斷崖絶壁をなし、南より西にかけて亦深い谷をなし、北方の一面も懸崖である。此の南、西、北の三面、は濠を設けた所で、後世これを利用して、用水地となして居たが、寛永年間に埋めて、今の如くに水田にしたと傳へて居る。城は嘉慶元年二月、楠氏の部將野田四郎正勝の、創めて築いたるもので、これより子孫三代、皆此れに據つて忠節を盡し、常に北軍を惱まして居つたが、延文元年落城と共に、廢城となつたのである。

念 照 寺

此の寺は、野田村大字北野田の民家の中にある、真宗西本願寺末の寺院である。記録の徴すへきものなくて、寺傳は全く不明である。現今の本堂は、寛延三年二月の建立で、山門と本堂の欄間とは、稍見るへき彫刻である。境内の右側に建てる鐘樓には『維時安永八年歲次己亥春三月戊戌日、泉州堺住、菊浪伊右衛門兼次鑄之』の刻銘ある梵鐘か懸けてある。

釋迦院

此の寺は全村大字丈六の中央に在る。今は真言宗高野山高運院の、一末寺に過ぎないが、其の開基は天平年中、僧行基の日置庄大野の東北に建てられたる、丈六寺の院だと傳へて居る。丈六寺が正平年間に至つて、北軍の侵略を受けて、其の堂塔悉く焼失せるときも、幸に當院丈けは其の災を免かれたのであつた。然るに其の後に至つて何時の頃よりか、漸次衰微する所となつて、現今にては纔かに『堂の場』『西門』『

大門』等の地名に依つて、其の疆域の廣濶なりし往時を、追想するに過ぎない有様となつた。

大野關址

楠氏が大草村大字關茶屋の地に、關を設けて防備に當て、部將日置武光なる者に命じて、北軍を備へしめしと、傳へられて居るが、其の史實正確を缺ける許りでなく、其の位置すらも亦明瞭でない。此の里には、古來一里塚と呼べる古塚があつた。此の塚は高さ二間周圍八間許りに土石を盛り、其の上に庚申堂の小祠か建てられて、今も存して居る

大聖寺址

日置莊村大字原寺に在りし古刹で、其の草創は、聖武天皇の勅諭に因つて、天平三年僧行基か開基せるものである、そして古くから、大聖寺或は萩原寺などの名で、呼ばれて居つたが、正平二年の頃とかに、兵燹に罹つて堂宇烏有に歸し、其の後、辛く

も災を免かれた本尊の薬師如来は、假堂に安置して、纔かに祭祀を續け來つたが、明治初年に至つて遂に廢寺とせられたと、言ひ傳へて居る。

日高臺址

古傳に依ると、日置莊村は往昔日置部の居宅の有つた所である。日置部は此處に、方丈餘の樓臺を營んで、これを日置臺又は日高臺と稱し、累代家運榮えて居つたが、天正頃とかに兵火に罹り、終に燒失して衰微したと云ひ傳へて居る。其の場所は日置莊村大字西村の東北方、字日高の地で、現今にては悉く田圃に拓かれて、其の趾が詳でない。

阿彌陀寺址

此の寺は、黒山村大字阿彌の西南端に在つて、俗に宮寺と呼んで居るが、現今にては甚だしく荒れ果て、居る。寺傳によれば、聖徳太子の創建で阿彌陀佛を本尊とし、中頃絲薄山、光照寺と號して居つた。其の當時は堂宇壯嚴を極めたる、名刹であつた

が、嘉歴頃とかに兵亂に遭ひて、漸く衰微する所となり、辛くも法燈を傳へて、今日に及んだのである。

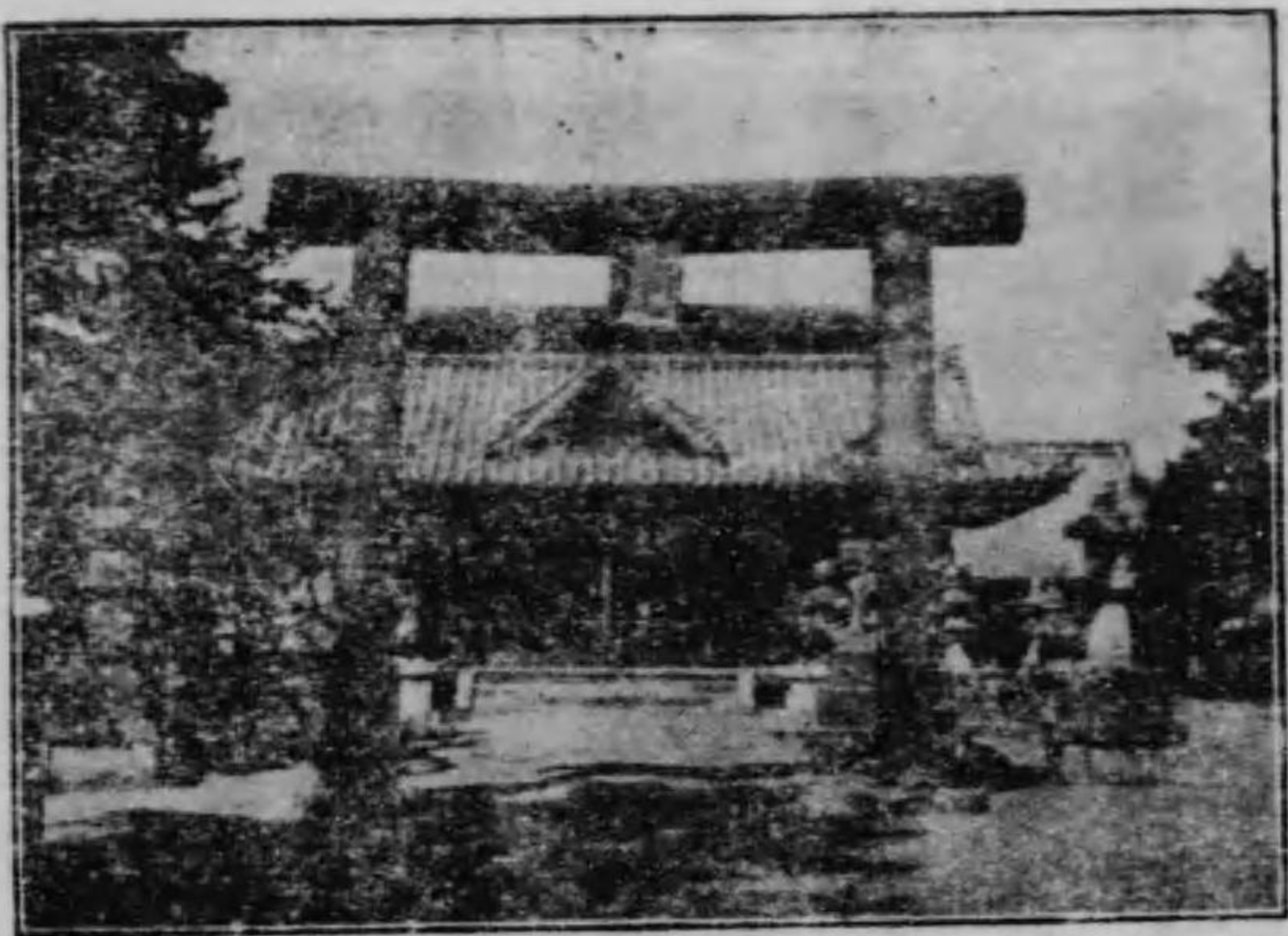
境内の一隅に經塚と呼べる、圓形封土の小古墳があつて、其の墳上の樹木や雜草の茂れる間に、小さな一基の寶篋印塔が建てられてある。此の塚は其の昔經卷を埋めし處だと傳へ、又は僧登蓮を葬りし古墳だとも稱して居る。其の塚の傍で、切り石を以て一區劃を繞らした中に、二株許りの薄か植付けてある。之れは昔僧登蓮が、此處に隱棲せる時に、殖へしものたと言傳へ其の葉は細くして恰も糸の如く、莖の長さ三尺許り、頗る風雅に富み、古くから増穂の薄と呼び慣はして常に雅客の愛玩せるものであつた。不思議にも古へより二株許りで、増しもせず減ひもせで、今に残れると古老は語つて居る。登蓮の歌に『秋毎に穂に出てまねけ糸薄くる人びとのかたみとも見ん』

阿彌の地には、河内志にも『小家六在阿彌村』など、記されある如く、明神塚、猿墓
其の他の古墳か多かつたが、何時か破壊せられて、其の完存せるものは尠くなつた。

菅生神社

阿彌の東方に舟渡池と云ふ大池があつて、其の東南數町の處に、平尾村大字菅生の
民家の藪が並んで居る。此の地は『和名抄』の所謂菅生の郷で、姓氏録河内神別の條に
『菅生朝臣、大中臣同祖、建速魂命三世孫、天兒屋根命之後也』とあることなどより
見れば、其の昔は、菅生朝臣の居地なりしかとも思はれる。

此の邑の南端に當りて、老樹蒼鬱たる菅生神社の廣濶な神域がある。本社殿は南面
して建ち今は祭神に菅原道眞を祀りて、土俗に天滿天神と稱へて居る。古くは、天兒屋
根命を祀れる延喜式内の大社で、此地に勢力を有せし菅生朝臣とは、密接なる關係を
以て居つたに相違なく、既に貞觀元年正月には、從五位上の神位をも受けて居つた。



河南の枝折

菅生神社

斯かる文献に徴するも、當社は夙に天兒屋根命を祭
神として居つたことは明で、菅公は延喜三年に薨せ
られたのであるから、貞觀より彼れ是れ四十餘年の
後であるので菅公の社の如きは、大方當社の攝社と
して、境内の一隅にて祀られあつたに相違無からう
が、何日の頃にか主客轉倒して、却つて本社殿に菅公
の靈を祀り、天兒屋根命は本社東隣の小殿にて、祀ら
るゝに至つたのである。

境内には『菅の淵』と稱する小池があつて、石垣を
以て其の周圍を繞らして有る。淵の前には『菅生神廟
碑』を建て、それに、『元文第二年丁巳秋月穀旦、崎

陽、沙門曇香拜撰、住持苾芻智空敬立』の碑銘が彫刻してある。此地方では、菅原道真か此の地に誕生せしと言傳へて居るが、これは會々菅生の地名に附會せるもので、元よりどるに足らぬ一片の地名傳説である。

當社は斯く由緒ある舊社であつたが、中古兵燹へいせんに罹りて、其の記録の如き悉く灰燼くわいじんに歸せしは、返すくも遺憾である。何年頃にか、當社の宮寺として高松山天門寺が、同境内に建てられたが、今は廢滅する所となりて、其の廢絶後の本堂が社殿の側後に残り、近年に至つて『夷神あひすかみを勸請して、其の堂内で祀つて居る。今も其堂の〇間むかひには、黄檗宗わうはくの僧悅山えつざんの書せる筆力遒勁なる、『高松山』の扁額が掲げられてある。

金岡神社

金岡村大字金田の中央に在る、式外郷社しきがいこうしゃである。創立の由來に就ては、記録の明徴すべきものがないが、口碑に依ると、今を距る千餘年前の創建で、古くは金田三所

宮と稱へて、牛頭天王ごうとうてんわう其の他の神を祀つて居つた。

然るに一條院の御宇、巨勢金岡こせうたなか此の地に生まれたので、死後其の靈を配祀して、金岡神社と改められた。

其の後社殿壯嚴を極め、境内の風致亦見るべきものがあつた。加ふるに何日の頃よりか、神宮寺じんぐうじも建てられて高野山末に列し、寺門亦榮え來つたが、明治維新の際神佛分離に會つて、其の僧坊は終に廢せられた。

神前には曾て、『河州八上郡、金田宮三所大明神、御寶前、永和五年歲次己未八日、檀主隼人祐小野兼武、冶鑄師李右尉山川助勅』の銘ある、梵鐘があつたが、今は淡路國三原郡上境村松應山西圓寺の、有に歸したとか言ひ傳へて居る。

近來に至り此の境内に、熊野神社、八阪神社、勝手明神社等が、大字菩提ぼだい、大字遠野とんの及大字花田はなだの各地より遷されて、配祀せらるゝに至つた。

因に、宇多帝の御代の畫家として、青史に傳はれる巨勢金岡は、此の地に住みしと言ひ傳へ、金岡淵などの地名も現存して居る。

池浦觀音寺

此の寺は、北八下村大字南花田小字藏の前に在る眞言宗教王護國寺の末寺で、池の浦普光山觀音寺と號し、今の本堂は當寺中興多聞院實祐師の建立で、慶安五年の建築である。

寺傳に依ると、聖武天皇の勅に依つて、僧行基か一字の寺堂を建立して、自刻の聖觀音像を本尊として祭れるに創り、やがて梵坊方八町に及び、堂塔伽藍薨を並べて頗る輪奐の美を極めたが、正親町天皇の天正年間に至り、織田信長の爲めに此地を戰場とせらるゝに及び、終に兵燹に罹りて、一字も残らず焼失するに至つた。ついで攝津住吉郷に、道專居士なる者あつて、此の尊像の靈感に感し、已か邨に精舎を建て、纔

かに焼失を免かれたる聖觀音像を本尊として祀つた。斯くて信仰を續ける中に、不思議にも此の尊像より、一寸八分許りの、閻浮檀金の聖觀音像が、更らに出現したので愈深く歸依し、其の子孫亦引續きて厚く祀つて居つた。斯くて江戸時代の初期、三代將軍家光の頃に及び、多門院實祐と云へる高德の僧此地に來り、靈跡の徒らに寒烟荒草の裡に埋れるを嘆き、此處に一字を再興して、道專居士の後裔に請ふて聖觀音像を受け、再び當寺の本尊として安置した、これより寺門再ひ昌へ、法燈相繼き相傳へて、今日に至つたと傳へられて居る。

寺觀音堂の棟札と稱して現存せるものに、『慶安五年壬辰仲春十一日吉辰、大工松原莊、藤原朝臣宗次』の文字が記されて居るとか、聞き及んで居る。

丹比行宮址

續日本紀に『天平神護元年十月十日丙戌、車駕自和泉國日根郡新作行宮、到河内國

丹比郡、丁亥到弓削行宮』とあるが、其の丹比郡の何地が果して行宮址なるか、今は詳でない。所傳に依ると、南八下村大字小寺の北方の地であつて、今も其の一部は縦拾壹間、幅三間許りの芝地が残つて居る。尙此の附近には『神殿池』『馬場の浦』等の地名の残れると、彼が行宮址と言ひ傳ふる芝地か、古來神聖なる靈地として語り傳へ今も之れに手を觸るゝを恐れ居る事などより見るも、眞らしくも思はれるのである。

國分尼寺の廢址

國分尼寺の址は、南八下村大字菩提の東南に在る用水池附近に擬せられて居る、其の近くには『國分東』『國分上』『國分池』等の地名が、今も傳はつて聊か此の説を援けて居る。確證として徵すべき記録が見付からなかつたので、不本意ではあるが、茲には傳説の儘を擧ぐることにした、尙此の事に就ては研究せねばならぬ。

法雲寺

當寺は黄檗宗第十三區宗務支配の巨刹で、丹南村大字今井に在る。寺の前より東に廻りて西除川の細流が、潺湲たる音を立て、流れ、其の濶き境大には老松が一面に聳立し、四周は叢林に依つて圍繞せられて居るなど、人里近き寺院としては、稀れに見る閑寂幽邃の靈域である。

山門は此の宗派獨特の様式に依つて建てられ、門楣に延寶甲寅吉旦木菴の手書せる『大寶山』の扁額が高く掲げられ、筆力適勁にして見るべきものである。

門を潜つて左折すると、其の正面に南面して天王殿が建ち、殿内に布袋像と四天王像とが安置してある。

此の直後の建物は即ち金堂で、此處にも亦『寛文七年丁未仲夏』法雲禪寺、と隠元の手書せる扁額が掲げてある。

此の堂内には、釋迦の木像を中央とし、其の左右に觀音、阿彌陀の木像を安せる外に

大日如來像、地藏尊像、開山禪師に就きて修學せる學徒の像などが、整然と列べてある。金堂に東隣して建てる小堂は、所謂開山堂で、堂内には花崗岩を疊みて墓を作り、其の上に當寺開山慧極老和尚の木像を安置してある。

曾ては金堂の右側前に、鐘樓があつたが、近年に至つて反對の側に移された、梵鐘は延寶庚申年小春十日、大寶嗣祖沙門慧極の銘文を鐫し、大阪松下七郎左衛門尉、藤原吉次の鑄作である。

寺傳に依ると、當山は弘法大師の建立にて、其の初めは神福山長安寺と號し、眞言宗の一巨刹であつたが、永和の頃(?)に、狹山池の堤防が決潰して、其の川筋も當る所から、終に堂宇の流失する所となつて、廢滅するに至つた。然るに寛文の頃に至り僧宗月なる者觀音の靈夢に因て、地中より觀音の靈像を感得し、此處に草庵を結びて厚く信仰して居つた。其後全十二年に及び黄檗の第二代木庵國師の上足慧極道明禪師を、此處に請じて伽藍の建立を乞ひ、禪師を當山の中興と仰ぎ黄檗宗に改むるに及ん

で、法燈再び榮ゆるに至つた。尋いて延寶元年には、官許を得て、大寶山法雲禪寺と號し、其後承傳して今日も及んだのである。

又當寺の本尊は、過現末三千の佛體にて、今津淨水居士が、明國印官範道生をして刻ましめしと傳ふるものである。又寛文中僧宗月が、靈夢によりて地中より感得せる觀音像は、世に『堀出し觀音』と稱して今猶當寺に收められて居るが、丈七寸許りの陶土製の像で、到底名匠の手に成つたものとも思はれない。

慧極禪師は長州萩に生れ、父は小田氏、母は岩佐氏、幼にして野州興禪寺に入り、後木庵禪師に就いて佛學を學びたる一代の碩徳で、やがて當山を再興し、晩年は大和慈光寺に在て、其處に入寂したが、後此處に葬つたのである。尙當寺は狹山藩主北條氏の香華院に當てられて居つたので、今も本堂の背後には、北條家の墓碑が建て列んで居る

來迎寺

丹南村大宇丹南の西北端、段丘上に建てる融通念佛宗の中本山で、今井の法雲寺とは纔か數町の間に在る。寺は石垣の上に白堊の塀牆を繞らして境内を圍み、其の中に本堂其の他の建物が、雜然として薨を並べて居る。

寺僧に依ると、往昔此の地は一の丘陵で、天平以來、毘沙門、又は多聞院とも云へる小堂があつたが、其の後、鳥羽天皇の勅願に依つて、崇徳天皇の天承二年承應大師此處に融通念佛を勸進して、堂宇の建立を行ひ且つ寺を阿彌陀寺と稱するに至つた。其の後、後醍醐天皇の御代に至り、法明上人出で、石清水八幡宮の神託を被りて、融通念佛宗を再興弘通するに逮び、亦此の地に來つて當寺に留錫し、再び伽藍を建立して只管弘教に盡し、やがて官允を受けて、茲に當山を、十箇郷辻本別寺、諸佛山護念院來迎寺と改稱して、上人が菅生天滿宮より感得せる、阿彌陀如來の畫像を本尊として、祀るに至つた。これより法燈輝きて相繼ぎ相傳へ、以て今日に及んだのである。只今の本堂は、當山第十世大純の時代に建てられたるもので、元祿寛保頃の建築で

ある。其の堂内の正面には、安阿彌作と傳ふる丈け四尺許りの、阿彌陀如來木像を安置し、他に毘沙門天と、辨財天の木像とが配せられてある。當山々門の傍には、丹南藩主高木家の墳墓があるが、こは當寺が、高木家累代の菩提寺なりしが爲めである。

當寺の寶藏には、幾多の什寶が收められて居るが、就中法明上人の、菅生天滿宮より感得せると傳ふる阿彌陀如來の畫像の如きは、其の最なるもので、像の丈け二尺二寸、紺地に金泥を以て書き、御衣も、蓮華も後背も、悉く漢字梵字を以て諸經陀羅尼を、書き續けたる世に珍らしき畫像である。尙、其の昔今井の長安寺が廢滅せる際、當寺の前身たる阿彌陀寺に保管を托されたと言ひ傳ふる、辨天像なるものがある。これは弘法大師が護摩一萬座を修法せし時、護摩の灰を以て焼きたると傳へ居るもので高さ約八寸、幅六寸餘、厚さ一寸許り、其の表面に、辨財天像と十數の童兒の像とを浮して現はし、裏面には、左掌を捺して、其の掌型の内に、『天長十年七月七日、於江島辨財天法秘密護一萬座奉修行、以其炭此形像作者也、空海』の文字が浮かして現はし

である。其の眞偽と技工の優劣に就ての批判は別問題として、聊か珍らしいものであるから、特に茲に掲げて置く。

丹南陣屋址

來迎寺の寺門を出で、本道から左へ細徑を取つて進むと、二町餘りで小丘陵をなせる高臺の地がある、此處が即ち丹南藩主高木家の陣屋址である。

所傳に依れば、元和九年高木主水正次が、一萬石の封を受けてから、此處に陣營を設けて子孫相繼ぎ明治維新に及んだ。斯くて同二年には藩主高木正善が、新政の定むる所に依つて此處に藩政を執つたが、同四年廢藩置縣の令出るに及び、廢せられて一時丹南縣の廳舎となつた。やがて府縣の廢合行るに至り、堺縣に合併せられたので、茲に全く廳舎の廢滅する所となつたのである。其の廳舎の趾は悉く民有地となつて、今は一面に田圃に耕され、昔の面影は少しも残つて居らない。

黒山の荒陵と丹比神社 附泉福寺

此の荒陵と呼べるは、黒山村大字下黒山の西方に崛起せる、頗る大きな古墳であ

る。墳は前方後圓式で、其の周圍には水濠を以て圍繞し、明かに陵墓の形式を備へ、今猶完全に保存せられて、西面して居る。

此の荒陵に就ては、黒姫皇后陵に擬し、又は春日大娘 皇后陵ならんとも稱して、異説多く未だに荒陵として存する有様である。夙に明治初年には、宮内省にても、春日大娘皇后陵として、一時取扱ひ居つたが、同十二年頃に至つて、遂に廢せられた、尙此の附近には、恰も陪冢の關係を保てる古墳が、四つ許りも點在して居るが、孰れ高貴の方の古墳には相違あるまい。聞く所に依ると密かに此の古墳を、破壊して田圃に當てんと、計畫する者か有ることの事であるが、不見識も甚だしきものである。

此の荒陵から、下黒山の民家の間を東へ通り抜けると、其の前方に當りて老樹鬱々たる森が見ゆる。此の森林の中には、上殖葉皇子を祀れる、丹比神社が鎮座して居る。丹比神社は古くから土俗に若松天神と稱へ來つた社で、既に文徳實錄、三代實錄

等にも、屢々授位、奉幣の事の見わたる舊社で、延喜式に列せられて居る。近年に至つて丹南村大字眞福寺の、樸本神社いちももとの合祀が行はれた。此の神社は、應神天皇を祀り、古くから八幡と稱し社頭の傍の地名を、樸本と呼びなして來て居つた舊社であつた。

因に、荒陵の北方數町の處にある、丹南村大字大保だいほには、聖德太子の開基に係はる古刹、大保山泉福寺があつた。中世甚だしく衰微したが、明和年中に至り隆巖禪師出で、再興し、尋いで智盛、慈雲等の碩德を経て明治に及び、同五年廢寺となつた。やがて當寺の堂宇は破壊せられ、古くより祀れる觀世音木像と地藏尊の木像は、同所の西福寺に移され、智盛和尚の手書せる大磐若經數百卷は、同地の舊家森繁次氏の所藏する所となり、寺址は全く荒地となつて居る。

德專寺

丹比村大字多治井たぢみの東南方に在る眞言宗の寺である。

寺傳に依ると、弘仁年間僧空海の創建に係はる巨刹であつたが、天正の頃、松永久秀等の此地に據れる時、此の堂宇を破壊して城廓を築くに及びて、終に廢滅する所となつた。其後天和年中に至つて、僧快圓くわいゑんなる者、靈刹れいせつの廢絶するを嘆じ、此處に寺堂を建立して、漸く面目を改めたが、其後星霜の移るにつれ、再び衰微に傾き終に今に至つたのである。

德專寺城址

德專寺城とくせんじは、戰國の頃松永久秀の據れる城で、今も德專寺の境域と、其の東南に續ける一帯とを總稱して、「城の山」の地名で呼んで居る。此の地は東方に當りて、東除川ひがしけの懸崖けんがいに臨み、自ら要害の地形を備へて居るが、今は遺蹟らしき何物も残つて居らぬ。

平尾城址

平尾村大字平尾の地は、富田林方面から羽曳山脈以西の諸部落や、堺に往來する古來要衝の地であつた。

南山巡狩録に依ると、弘和二年二月、楠木正儀等、山名氏清の軍と此處に戦ひて破れ、やがて要害に引き退いた記事が見え、後又、元中五年七月には楠木正勝も亦氏清の爲め、此處に討たれて千早城に還れる事があつた。尙一説には楠木正成も守兵を此の地に據らしたとの傳説がある。

之れ等の城址は果して何れか、孰れ邑の東方に當れる羽曳山脈中の丘陵の一端には異論あるまいが、遺憾ながら現今では其址不明である。

輕墓の掘拔石棺

古市驛で下車して竹内街道を西へ進み、大字輕墓の邑中を出端れて、凡そ二町程歩むと道路の左側に當つて、前方後圓式の西向せる荒陵がある。此の古墳の周圍には、

水濠の址か今も残つて、其の西南部には、水が湛へられて居る。土地では此の塚を「峰か塚」と呼び、古市の伊岐宮白鳥神社の最初在つた所だと言ひ傳へ、此地方一帯の字を伊岐谷と稱して居る。

此處から西方へ約一町程登ると、埴生山脈中の一丘陵の東端に當りて、當地の舊家淺野氏の別荘が建てられて居る處がある。其の別荘の建物の背後には、半ば破壊せられた瓢形の古墳があつて、既に學界に著名な堀拔石棺が露はれて居る。

此の石棺は俗に練り石と稱する凝灰岩で、普通の石棺の如く、蓋石と身石とが別々のものでなく、全部か全く一石で出來上つて居て、尙其の前方には寢棺を横から挿し入れる爲めに、横穴が穿たれてある。

喜田博士の實測せられた所に依ると、棺の大きさ、外部にて長さ約八尺二寸、幅約四尺二寸、高さ約五尺五分、其中屋根の分高さ七寸、棟の頂の長さ七尺五分、幅三尺



棺内の穴は長方形をなして、奥行約七尺一寸、高さ二尺一寸、横二尺九寸、石棺の左右と後方には、石棺に密接して、一尺乃至二三尺大の割石わりいしの石壁が作られてある。石棺の前面に當れる入口には、口を栓ふさくべき石栓は紛失して居る。此の石棺は嘗て一度發掘せられたことが有ると見えて、先年(明治四十四年頃)、發掘した時には、棺内に泥土が流れ込んで居て、纒かに土器の破片と骨片とが發見せられたのみで、他に何物も無かつたそうである。

之れを要するに、此の石棺は其の形式に於て他に類例なき珍貴のもので、考古學上最も貴重な資料だと、

喜田博士の推獎せられ居るものである。

善正寺の廢址

此の石棺から、西方に當れる一帯の丘陵は、古刹善正寺の遺址で、今も松樹の下には、布目瓦ぬのめがわらの破片が夥しく散亂して居る。日本後紀の延暦十八年三月丁己、菅野眞道すがのまみち奏言の條に、『己等先祖葛井、船、津、三氏墓地、在河内國丹比郡、野中寺以南、名曰寺山、子孫相守、累世不侵、而今樵夫成市、採伐冢樹、先祖幽魂、永失所歸、伏請依舊令禁、許之』とある所謂寺山は、即ち此の丘陵を指したものであらうとは、既に史家の間に論說せらるゝ所である。之れに依つて見るも、敏達天皇の朝に仕へて、一切の史官が解し得ざりし表文を讀みて、叡威に預りし王辰爾の後裔に當れる船氏、津氏葛井氏が、延暦以前に此地方に繁延せるを察すべく、今此の地方を善正寺山と呼へる事より見て、三氏の墓地として何等の關係か有つた様に思はれる。尙此の事に關しては研究の餘地が

河南の枝折
有る。

二八八

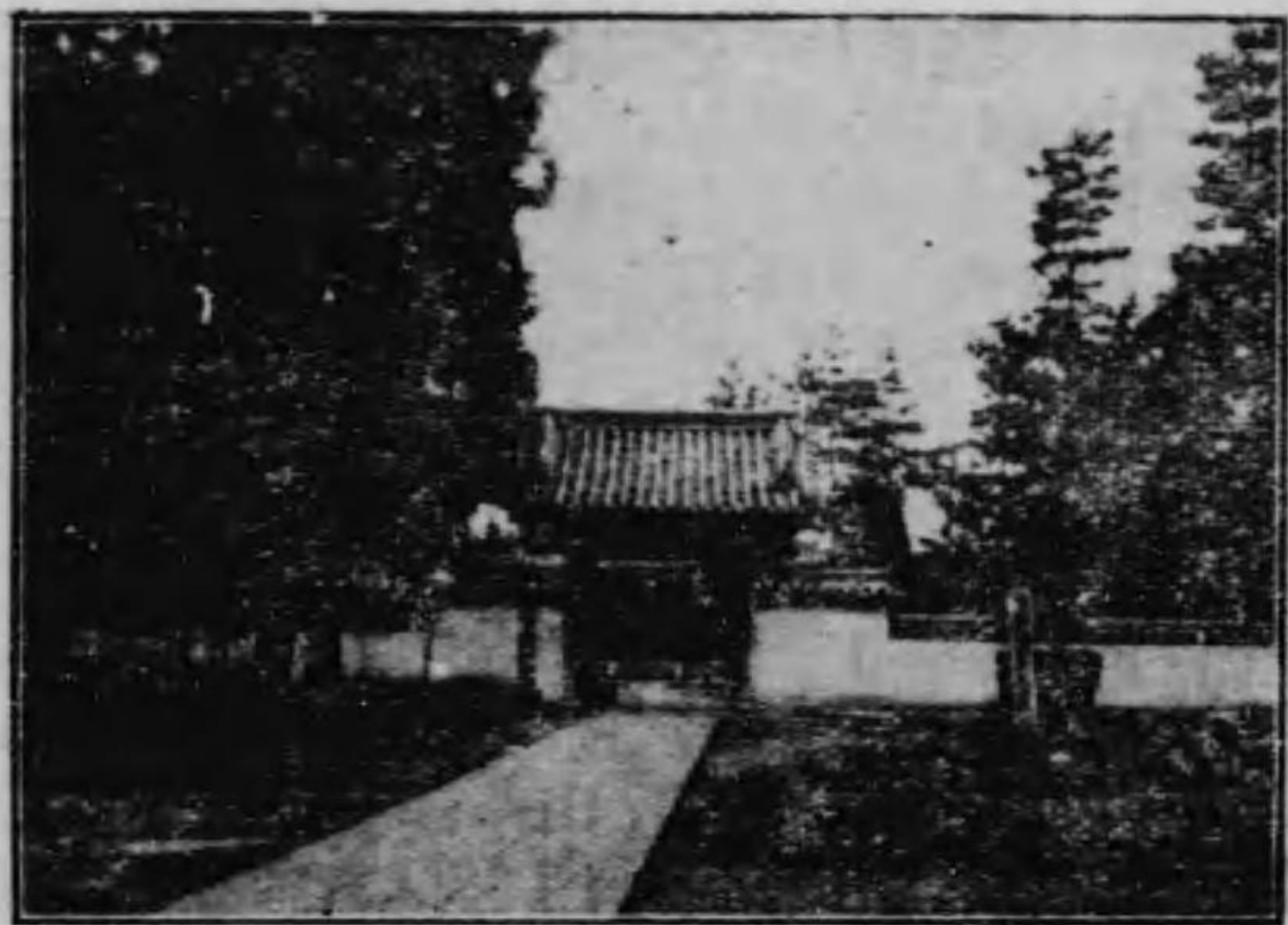
來目皇子墓

掘抜石棺の處から、峰を傳ふてものゝ、一町許りも行くくと、字野々上に通ずる道路の西側に當つて、埴生崗上の墓と呼ぶるゝ來目皇子の墓がある。此の古墳は兆域の周圍纔かに百五十間三分、形式は方墳で南面して居る、其の墳上には既に、石廊の一部分が露はれて、老樹が之れを護つて居る。

皇子は、用明天皇の御子にて、天皇より新羅征討の大將軍に任せられて、筑紫に渡らせ給ふたが、推古天皇の十一年春二月、病を獲て筑紫に薨せられ、後、此の地へ葬られたのである。

野中寺

來目皇子の御墓から、峰續きを北へ辿ると、埴生村大字野々上に出る。此の村の北



野中寺 (中之太子)

端に當つて南面せる巨刹は、聖德太子御草創の野中寺で、世に中の太子と稱へられ居る名刹である。

寺は推古天皇の御宇、厩戸皇子の開基せられし所謂四十六院の一つで、蘇我馬子の創建に係はり、其の當時は金堂、講堂を始め堂塔伽藍を並べて、美を盡し華を極めたる靈場であつたが、建武年間に至り南北争亂の爲め兵燹に罹りて、其の伽藍は悉く烏有に歸する所となり、只盛時を偲ぶ古礎のみが、纔かに名残を留めて居るに過ぎなかつた。其の後三百餘年の星霜を経て寛文年間に至り當代の碩徳政賢英阿闍梨なる者、此地に留錫して草庵を結ぶに及び、斯くの如き靈刹が

徒らに廢滅に任せあるを嘆き、遂に山城國榎尾山西明寺派の名僧、慈忍惠猛和上を此處に請じて、當山の再興を謀つた。これより律宗の道場となり、中興惠猛の學徳を慕ふて集まるもの漸く多く、やがて當山の末寺の諸所に建立せらるゝありて、終には一派律宗の總本山如法戒律の道場となるに至つた。然るに其後享保年中に至りて火を失し、地藏堂を残すの外山内の堂宇は、悉く焼失する所となつた、ついで諸堂宇の再建をなしたが、終に舊觀に復するに至らずして明治に及び、律宗を改めて眞言律宗となし、高野派中本山に列して今日に至つたのである。今境内にある建物は、地藏堂の外孰れも火災以後の造營に係はれるものである。

山門内の正面に南面せる建物は金堂即ち龍護殿で、此の堂内には、藥師如來像を中央に、脇士愛染明王と不動明王の木像とを其の左右に配し、此の外に十一面觀世音像聖德太子像などが安置してある。

金堂の右側には大師堂、左側には鐘樓、地藏堂などが建てられ、之等諸堂の背後には、經藏、客殿、觀學院、庫裏等の建物が、整然と建て列んで居る。尙境内の西方一帶は、廣闊なる森林で樹木鬱蒼として晝尙闇く、中に鎮守を祀り、西北方の一隅には數十の墓標を並べて青苔滑かである。

鐘樓には『貞享三年歲旅丙寅迦提月沸歡喜日、河州志紀郡太田村桑野茂兵衛廣命喜捨、洛陽三條釜之座、和田信濃大椽長壽鑄造』の銘ある梵鐘が吊されてある。

地藏堂内に安置せられ居る地藏菩薩の立像は、國寶の指定を受け居る頗る優作の木像で、御長け三尺八寸、烏佛師の作と傳へて居る。

當寺の寶物は、諸佛像、寫經を始め、其他數十點の多きに及んで居るが、中にも金銅の彌勒菩薩像と、『鳴瓦』と稱へて面白き傳説を有せる古瓦などは、其の優なるものである。殊に此の金銅佛は、御丈け一尺二分五厘、八角獅子座の上に半跏趺坐せる

靈像で、此の像に、彫刻せる造像記にても知らるゝ如く、今を距る約千二百五十餘年前の鑄造に係はるものである。其の様式の如きは、既に木崎氏の説いた如く、御物な

る四十八體佛と範疇を同じくせる、眞に世に稀れなる靈像である。次に参考の爲めに刻銘之造像記を掲げて置くが、甚だ讀み難い文である。



野中寺(金銅佛)

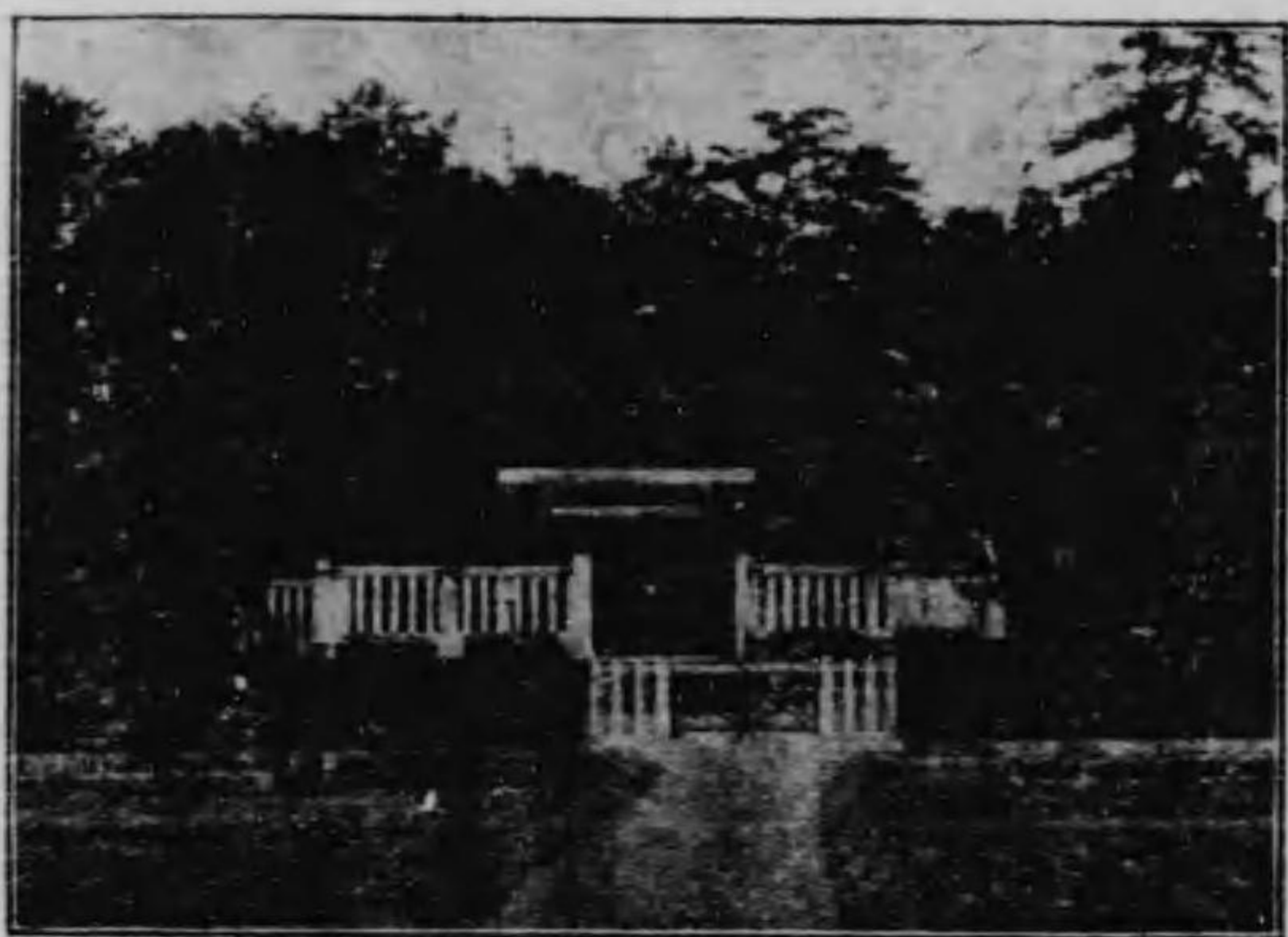
『丙寅年四月大舊八日癸卯、開記橋寺智識之等詣中宮天皇大御身勞坐之時、誓願之奉彌勤御像也、』

友共人數一百十八、是依六道四生人等此教可相之也。』

又本堂と方丈との歩廊には、『元祿第四歲次辛未孟陬白滿布薩日、住持比丘慈門信光

謹撰、洛陽南氏彌三右衛門尉福房喜捨、泉州池田氏金吉鑄造』の刻銘ある鐘が掛けてある。

當山に參詣する者の最も注目せらるゝは、境内の内外に現存する幾多の殘礎である。今其等の位置と個數とを紹介すると、今の山門前數間の處には、七個の礎石が略長方形に配列せられ、其の中四個には表面に圓形造り出しがある。又山門内の東側には方形の土壇の上に、合計十六個の礎石が、稍東西に長方形に現存し。之れに對する西側にも、十三個許りの殘礎が略方形に並んで居る。尙之等の北方で現今の本堂の前にも其の左右兩側に圓形造り出しのある礎石が、各一個宛現存して居る。之れ等多くの殘礎は大分當寺建立當初の物かと思はれる。尙配置の上から見て、既に岩井武俊氏も述べられた如く、今の山門前の礎石は舊山門の殘礎で、山門内は全く推古式配置を殘せると想見し得られる。即ち門内の左に塔婆、右に金堂、其等の後方正面に講堂があつた



仁賢天皇御陵

ので、恰も今の法隆寺伽藍と全く同様に配置せられて居つたのである。

要するに當寺の残礎は、我が歴史上に重要な意義を有すると共に、又一面に於ては、當寺の創建を裏書きする好資料で、永遠に此儘存せなければならぬ貴重なるものである。

仁賢天皇陵

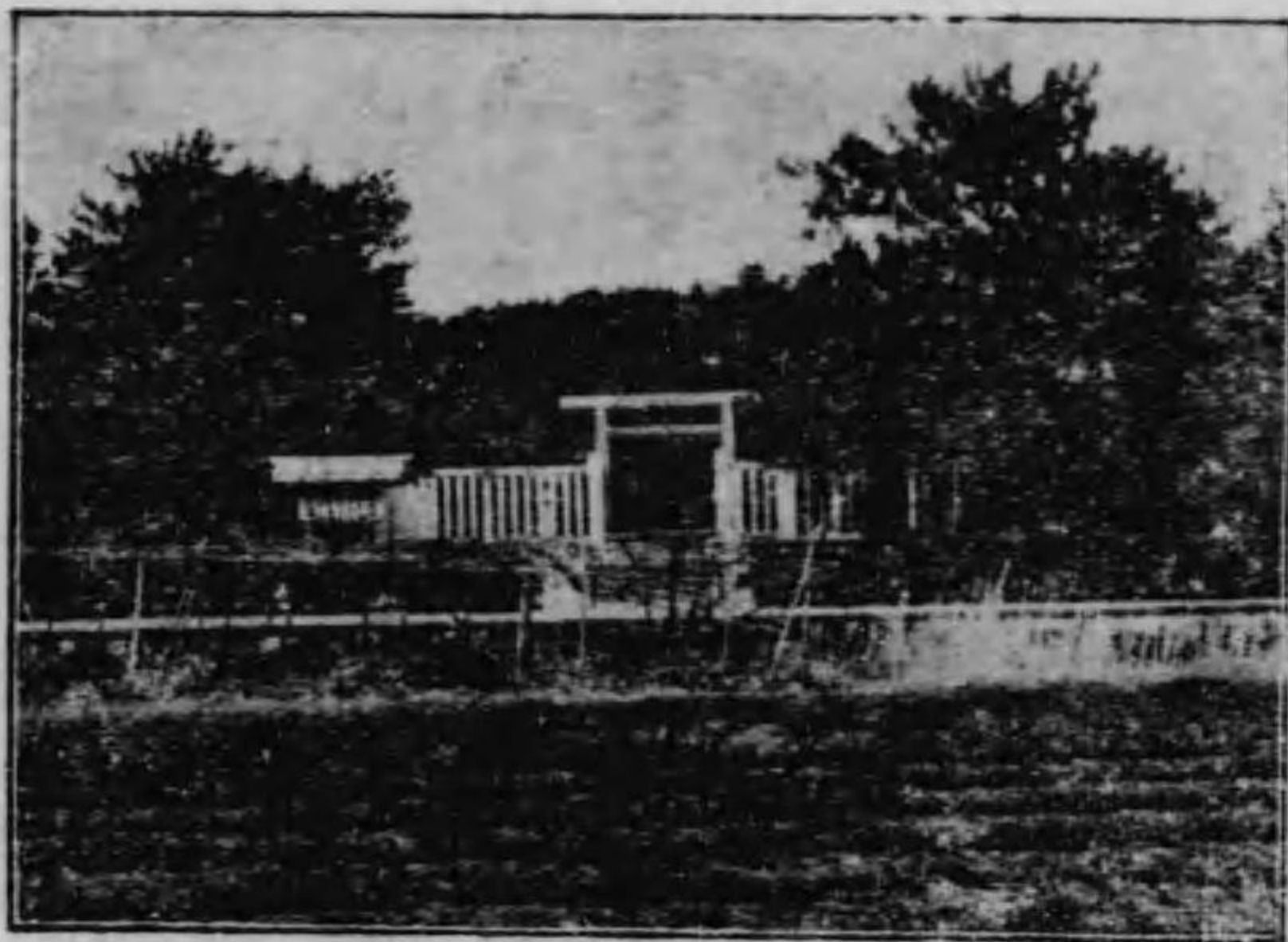
此の御陵は、野々上の東南方、輕墓へ通ずる路の東北側に當れる田圃の中に在る。世に埴生阪本陵と稱する御陵である。其の兆域の周圍は三百十間、三段に築ける前方後圓式で、周圍には隍を繞らし、墳上は老樹翁

鬱として南々西に面して居る。其西北にて此陵に極く近き處に、陪塚らしき二個の圓形封土の古墳が並んで居る。

天皇は御名億計王、市邊押磐皇子の皇長子に在らせられた。御父弑せられ給ふた後は、皇弟弘計王と共に、難を丹波に避け、更らに播磨に赴かれたが、清寧天皇の二年迎へられて皇太子に立たれた。清寧天皇崩御の後、皇弟弘計王の功績を稱へて、却て先きに天位を譲られ、太子は舊の如く皇太子で在らせられた。後弘計王の顯宗天皇崩せらるゝに及んで、茲に初めて位に即き給ひ、御在位十一年餘りにて大和に崩せられ、後此地に葬り奉つたのである。

仲哀天皇陵

此の御陵は、藤井寺村大字岡にあつて世に、惠我長野西陵と稱し、野々上と藤井寺村との中間に位して居る。陵は前方後圓の墳で、其の大き應神天皇陵に次ぎ、前後の



仲哀天皇御陵

徑百三十三間、後圓の徑八十一間、前方の幅百三間、後圓の高さ六十尺餘、兆域の周圍は、六百五十二間に及び、南々西に面して周圍には隍を繞らし、墳上には松樹が繁茂して居る。又陵の北方に一個、東方に二個、南部に二個許りの古墳が、各陪塚の關係を保つて存在して居る。

天皇御諱 足仲彥命、日本武尊の第二子に在らせられ、成務天皇の皇太子となり、天皇崩御の後、位に即き給ふた。皇后は氣長足姫命即ち神功皇后である。

御治世中、熊襲親征の御爲め、筑紫に渡られて、なのおがたかしひのみや 櫛日宮に軍事を督させ給ふたが、會々新羅の反するに

會ひて、討滅未だ半ばならざるに、櫛日宮に崩せられた。既にして皇后新羅を討ちて十二月凱旋せらるゝに及び、改めて此地に厚葬せられたのである。

應神天皇西方古墳

應神天皇の惠我藻伏崗陵の、西側の一帶に掛けては、夥しき圓塚及び瓢塚が雜然として散在して居る。之等の中には、サント塚、ハサミ塚、グミ山、はかやま 墓山、ムコ塚、にしうま 西馬塚、等の名で呼ばれ居るもあれば、或は全く無名のものもある、其の大小も種々あるが、其の多くは應神の陪塚としての關係を保つて居る。之等の古墳に就ての研究は、頗る興味あるが今は其の個々に就いて書くべき違がないのを遺憾とする。

葛井寺 (西國第五番札所)

藤井寺村大字藤井寺の中央、大阪街道に沿へる巨剎で、紫雲山葛井寺又は剛琳寺と號し、殊に西國三十三ヶ所の第五番の札所として、其名夙に世に聞え、參拜者は日々

船釋として般賑を極めて居る。

其の樓門は、寛政八年の建築に係はるもので、普通に南大門と稱する、重層朱塗の壯麗なる建物である。門の入口の左右には、持國天、增長天の巨大なる、然も其の製作優秀な二尊像を安置してある。門内磴道の東西に亘れる左右兩側には、菩薩堂、納札堂、鐘樓、茶寮などが、相對して建てゝある。

菩薩堂には、本尊の御丈け五尺八寸の木像阿彌陀如來を、中央に安じ、其の左右に二十五菩薩の木像が、整然と安置してある。納札堂は聖觀音像を安置し、此の建物は享保年中の建築である。

鐘樓は慶安三年の建築で、其の大きき梁間一間二尺五寸、桁行一間四尺二寸、中に、慶安五年癸辰年九月吉良日に、當山の權律師昌余が、鑄造したる梵鐘を掛けてある。

本堂は樓門に正對せる南面の建物で、其の大きき、梁間七間半、桁行八間、總瓦葺で



河南の枝折

葛 井 寺

ある。此の建物は、寶曆三百年、當山住持宥仙の再建に係り、堂内には稽文會、稽首勳、父子の彫刻と傳ふる、御丈け四尺五寸の千手觀音坐像を安し、其の左右には地藏尊と正觀音の木像とを、脇立として安置してある。之等の佛體は尊容孰れも端嚴、殊に本尊の觀音像は、一千四十二臂を備へた、名匠苦心の末に成れる優作で、兩脇立の像亦刀法賞賛すべき靈容を現し、無限の慈悲を垂れ居る妙相は、人の心の底に何物をか印せなければ止まない力がある。

本堂の西隣には、廻廊を以て續ける護摩堂が建ち、此の中に智證大師の作と傳ふる不動明王の木像を、本

尊として安置してある。

當寺は其の創め、聖武天皇の勅願に因て、創建せられたる巨刹で、本尊の千手觀音は、稽文會父子が勅命を受けて彫刻し、神龜二年三月の開眼供養には、藤原房前を勅使とし、僧行基を導師とせられたのであつた。これより皇室の御尊信淺からず、平城天皇の御代には、阿保親王の御子業平朝臣勅を受けて伽藍の修築を行ひ、且つ庵室を結びて久しく參籠せられた。其の後花山法皇西國御巡禮の砌りは、親しく當山に寄せ給ひて御詠を賜ひ、清和天皇の御代に至つては、菅原道真屢々此處に參詣して、時の當山別當堯覺上人とは法りの友垣を結び、互に法門の奥儀を語られた。降て元弘の頃に及びては、後醍醐天皇亦深く當山に御叡信あつて、楠木正成を勅使として屢々繪旨を賜はつた。然るに其の後明應二年に至つて兵燹に罹り、樓門三重塔、奥の院、鎮守等を焼失したが、幸に本堂は劫火を免かれたので、日ならず舊觀に復するを得た。

永正七年八月の大地震にあひて、伽藍悉く倒壊する所となり、一時は殆んど滅亡の悲境に墜ちた。斯くて寺僧等は諸國に大勸進をなして信者の歸信に訴へ、漸く再營を見るに至り、やがて豊臣秀頼之れを修築し、加ふるに中河内郡平岡村に於ける寺領を寄進した。徳川時代に至つては、代々の將軍又寺領の朱印を與へ、斯くて今日に至つたのである。

當山の寺寶として今に傳はるものにては、三條西實隆の筆なる葛井寺觀進帳、正平九年七月七日右中辨の花押ある。後醍醐天皇綸旨、正平十六年十二月二十三日の足利尊氏の奉書、貞和四年十一月の楠木正儀の制札、天正八年卯月日の織田信長の制札、を始め、正平三年八月、正行以下の者が陣中にて手寫せると傳ふる大般若經數百卷、土佐將監光信筆の葛井寺古伽藍圖、松蟲鈴、海膽楊柳觀音像五軀、古伽藍修理の瓦等が、最も著名のものである。就中古瓦は、幅八寸八分、長さ一尺一寸許りの平瓦で、

通例唐草模様などのあるべき個所を割線を以て中央より二分し、各の左右より中央の割線へ向つて、『葛井寺後修理瓦、久安三丁卯年三月六日』の凸銘あるもので、布目の趾歴然たる古雅掬すべき古瓦である。

尙當寺本堂の背後なる庭園内には、普く世に知られた紫雲石の燈籠がある。此の燈籠は高さ六尺三寸、春日造りの古色蒼然たるもので、其の火袋も臺石も共に六面で、面に唐獅子の彫刻がある。今は笠石の巖手の如きは大いに缺損して居る。此の燈籠は聖武天皇の御寄進せられたのであつたが、花山法皇當寺に御拜あらせられた砌、『まるるより、たのみをかける葛井寺』と御口すさみあると、不思議にも此の燈籠に紫雲か棚曳いた。

法皇此の奇瑞を拜して直ちに、『花のうてなに紫の雲』と詠ませられたといふ、言傳へのある燈籠である。

境内の西北隅の一部は、昔業平朝臣當山に參籠せし時の、草庵を結ばれた址と言ひ傳へて、今も業平の屋敷址などと呼んで居る。

因に、當寺を葛井寺と稱する由來は、昔葛井安元と云へる者が、一度死して冥府に到つたが、觀音の冥助を受けて蘇生したので、これから佛徳の高きに感じ、身命を抛つて當寺の造營に盡したと云ふことに、起因して居ると専ら言ひ傳へて居る。然しこれは只民間の俗説で、それよりは、王辰爾の末裔にして菅野氏の祖に當れる葛井氏との間に關係を見出すべきであらう、同族の津氏が字津堂の地方に據りて、北宮の大津神社と因縁あるが如く思はれると同じく、藤井寺村は葛井氏舊居の地で、此寺も或は葛井氏の氏寺であつた爲め、葛井寺の名が起つたのであらう、と説かるゝ人もあるがこれは至當の論として賛すべきである。

葛井寺の樓門から西へ進むと、ものゝ半町で、樹木鬱々と茂れる神域にあつて其の社前には二町にも及べる馬場がある。これは即ち辛國神社である。此の社は本殿に饒速日命を祀り、左右の小祠には八幡宮、市杵島姫を祀れる、式内の舊社で、元、字岡の氏神であつたが、近年に至つて字野中の野中神社、字藤井寺の式内長野神社などを合祀して、今は藤井寺村の總氏神となつた。當社の由來に就て、里俗には高屋城に據れる畠山氏と、何等かの關係ありし社の如く言ひ傳へ、又一説には辛國は唐國にて大陸の神を祀れるに起因せるもので、これも葛井氏及其の末裔菅野氏との間に、因縁がありし様に思はれる。

又社の北には、古くから辛國池と呼ばれ來つた、用水池がある。

因に、葛井寺の北方字岡に、素封家岡田家がある、當主壽一郎氏は松窓を號とし、詩文に秀で居る。其の先代伊一郎正孝は竹窓と號して、里俗の弊風を改め、教育の

振興に盡粹せる人であつた。正孝の先代伊左衛門正保も亦、農村の爲めに寢食を忘れて奔走せる高德の士で、其等の事蹟は河内名流傳に載せられてある。

藤井寺古戰場

藤井寺村は、古來數度の戰場となつたが、中にも、正平三年足利尊氏が、部將細川顯氏等を將として、楠木一族を攻めしめ、顯氏の軍兵葛井寺に着陣せし時に、

正行急に起つて此處に押し寄せ、細川の大軍を走らしめたるは、大平記に載せられて、世に名高き合戦であつた。

尙元和元年五月六日には、豊臣方の軍が此の邊より譽田八幡に掛けて陣を構へ、彼の道明寺玉手山合戦の一敗後、味方の收容を爲した處であつた。

(大平記に)『正行已に二十五、今年は殊更父が十三年の遠忌に當りしかば、供佛施僧の作善所存の如く致しては、今は命惜しとも思はざりければ、其の勢五百餘騎を率し

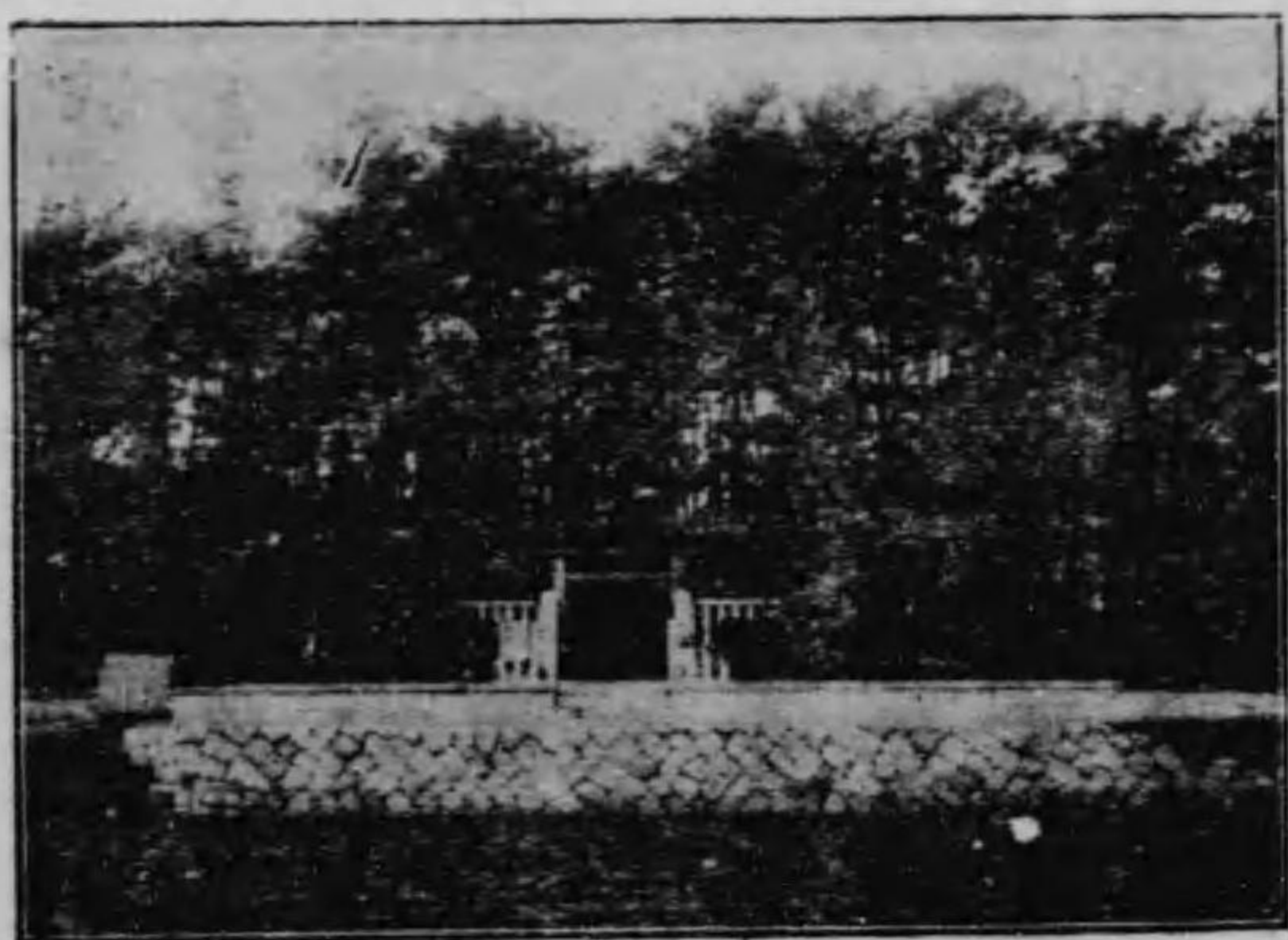
時々住吉、天王寺邊へ打出で、中島の在家少々焼き拂ひて、京勢やかゝると待ちたりける。尊氏はれを聞き給ひて、楠が勢の分際思ふにさこそあらめ、是れに邊境を侵し奪れて、洛中驚き騒ぐ事、天下の嘲哂、武將の耻辱なり、急ぎ馳せ向かひて退治せよとて、細川陸奥守顯氏を大將にて、宇都宮三河入道、佐々木六角判官、松田次郎左衛門、赤松信濃守範資、舍弟筑前守範貞、村田奈良崎、坂西、坂東、菅家の一族ども、都合三千餘騎河内國へ差し下さる。此の勢八月十四日の午の尅に、藤井寺にぞ着きたりける、此陣より楠が館へは七里を隔てたれば、縦令急々に寄するとも、明日か明後日かの間にぞ、寄せんすらんと、京勢油断して、或は物具を解きて休憩し、或は馬の鞍をおろして休める處に、譽田八幡宮の後なる山蔭に、菊水の旗一流ほの見えて、ひた甲の兵七百餘騎、閑々と馬を歩ませて打ち寄せたり、すはや敵の寄せたるは、馬に鞍おけ物具せよとひしめき、色めく處へ、正行真前に進みて喚きて懸け入る。大將

細川陸奥守鎧をば、肩に懸けたれども、いまだ上帯をもしめぬす、太刀帶くべき隙もなく見ね給ひける間、村町の一族六騎小具足ばかりにて、誰が馬ともなくひた／＼と打ち乗りて、如雲霞群りて控へたる敵の中へかけ入りて、火を散してぞ戦ひたる。されども續く御方なければ、大勢の中に取り籠められ、村田の一族六騎は、一所にて討れにけり、其の間に大將も物具堅め馬に打ち乗りて相順ふ兵百餘騎しばし支へて戦ひたり。敵は小勢なり御方は大勢なり、縦令進みて懸合するまではなくとも、引き退く兵だになかりせば、此の軍に京勢惣べて負けまじかりけるを、四國中國より駆け集めたる葉武者、前に支へて戦へば後には捨鞭を打ちて引きける間、無力大將も猛卒も同じやうにぞ落ち行きける。勝に乗りて関を作り引懸々々追ひける間、大將已に天王寺渡部の邊にては、危く見ねけるを、六角判官が舍弟六郎左衛門返合せて討たれにけり。又、赤松信濃守範資、舍弟筑前守三百餘騎命を名に替へて討死せんと、取りては返し

く七八度まで、踏み留めて戦ひけるに、奈良崎も主従三騎討れぬ、粟田小太郎も馬を射られて討たれにけり。此等に度々支へられて、敵さまで追はざりければ、大將も士卒も危き命を助りて、皆京へぞ歸り上りにけると、あるは如何にも見苦しき敵の破れ方、實に面白い戦ひであつた。

雄略天皇陵 及 隼人墓

此の御陵は藤井寺村大字岡から、堺市へ通ずる街道の南側で、高説村大字島泉の東約二町許りの處に在つて、丹比高鷲原陵と呼び他の一般の陵とは形式が、甚だしく異て居て、今は大體に、圓塚と拜所との、二つの部分から成つて居る。圓塚は周圍に水濠を繞らし、根廻りには石垣を築きて恰も池中の浮島の如くである、拜所は其の東方に陸を隔て、略長方形に延んで居り、此處にも亦圓形の封土が盛られてある。兩者を連結して一つの陵となつて居て、其の兆域の周圍は五百四間、方向は東向で松樹が繁茂



雄略天皇御陵

して居る。此陵は文久二年、戸田大和守御普請掛として、巡拜せるとき、舊領主秋元但馬守に命じて、根廻りの石垣や其他を修築せしめたと傳へて居る。

天皇は御名大泊瀬皇子、允恭天皇の第五子、安康天皇の同母弟で、御誕生の時神光殿に満ち、長しては剛健勇武の御性格の英主であつた。御治世中常に殖産に意を注がせられ殊に蠶事を奨励して、支那より種々の工藝家を聘せられた。御在位二十三年にして崩じ、後、此の地に葬り奉つた。

此の御陵の北に、路を距て、封土の高さ略四五尺境域略四十坪程の圓墳がある。墳の頂上には高さ四尺

許りの一碑を建て、之れに「忠臣隼人墓」と刻してあるが、それは大阪の人並川某が建立せるものである。隼人は天皇の近臣で、天皇を此處に葬り奉つてから、陵側に慟哭すること七日七夜、終に食を断ちて死するに至つた精忠の士であつたので、後有司禮を以て、此處に葬つたと傳へて居る。

明教寺

此の御陵から西へ向つて、字島泉を南へ折れると、南島泉へ達する。此の邑中の路の西側に聳ゆる堂宇は、明教寺で眞宗本願寺の末である。寺傳に依ると推古天皇の二年勅願に依つて、聖徳太子の創建せられたる寺で、元、鳳凰寺と號して天台宗であつたが、寛文年間僧慶譽に至つて今の宗旨に改めた。其後天正の頃織田信長の兵火に罹つて堂塔悉く焼失し、同十八年再建して今に傳へたが、遂に舊觀に復するには至らなかつた。當寺には見眞大師自作の自像を始め、明教寺舊境内古圖、秀吉寄進狀、加藤

清正書狀、家康祈願狀等の古文書などが寺寶として傳はつて居る。尙當寺鐘樓の梵鐘には、天和三癸亥稔九月十二日、和州葛下郡五位堂村津田大和大椽藤原貞次作の銘が刻してある。

因に島泉の舊家、吉本松三氏の宅へは、明治天皇河内に行幸の砌、御駐輦あらせられたので大に光榮として居つたが、數年前過て火を失し、御便殿に當てし建物を始め、郵宅の總てが焼失せるは、惜しみても餘りあることである。

尙同地の素封家吉村彦次郎氏の家は、吉村撫松の出でたる舊家で、累代畫を能くし當主亦南畫に秀で居る。家には楠公の感狀と稱せるもの、有栖川宮、空海、信長等の短尺を收めて居る。

撫松は名は光徳、字は有隣、丹青を善くし殊に山水に巧であると共に、茶儀、國雅に通じ、常に西浦村の寶壽寺の僧愛石、畫家半江等と交はり、風流韻事を嗜んで居つ

た。遠近より揮毫を請はれても、意に適はざれば容易に筆を執らず、明月の夜には一絃琴を弄ぶなど、恬淡高風の性格は近郷の敬慕する所であつた。

大塚山

南河内郡と中河内郡との境界に當つて、俗に大塚山と呼ぶ大古墳が、廣漠たる平野の中に、嶄然其の雄姿を現はして居る。

此の塚の周囲は彼れ是れ十數町に亘つて居る。彼の日本一の稱ある、大仙陵につぐ大なるもので、中河内郡の松原村と、本郡の高鷲村に屬して居る。其の墳域内の一部分には、今數十戸の戸數より成る字東大塚の民家が發達して居る。今は斯く、民家や畑地となつて、此の大古墳は破壊せられて居るが、尙後圓部とも思ほしき處の南麓に當て、大樹を以て略圓形に塙を繞らした中に、面白き傳説を有せる巨巖が残て居る。此の尨大なる古墳に就ては、古來説をなす者多く、故吉田東伍博士は、雄略天皇の

高鷲原陵に擬し、書紀通證などには來目皇子墓に當て、又一説には阿保親王の墓ならんなどとも稱へられて居つた。

斯かる著名の大古墳が、荒廢に任せて世に顧みられざりしは、眞に遺憾であつたが、大正九年十二月。史蹟名勝天然記念物保存指定調査總會に於て、之れを保存することに確定したので、近かく何等かの形式に於て、保存せらるゝに至るであらう。

因に、楠氏の一族にして、建武中興の際和泉の守護代となり、湊川の戰に於ては楠氏と共に戦ひ、還つて河南の地を守り、後正行に従つて賊將高師直の軍と接戦して、終に戦死を遂げたる大塚掃部助惟正は、此の地の人であらう。

城山古墳

藤井寺村大字小山から、平野、大阪に通ずる道路の右側で、宇津堂の東に路を隔ての如き大古墳が所謂城山古墳である。

此處には永祿年間に三好長慶の弟、笑岩齋入道康重が創めて城廓を築き、此の古墳を本丸に當てたので、之れから其の古墳たることが、世に忘れられて、單に城山と呼ぶるゝに至つたのである。今も此處には本丸、二の丸、三の丸、殿町等の地名が傳はるのみならず、數町の東方には、松並木があつて、當年の馬場先きの跡だと言ひ傳へて居る。其の後天正四年に至つて、織田信長の爲めに攻められてから、此の城は全くの廢城となつたが、享保五年に至り土地の者が城址の一角、即ち古墳の後圓部の西端に、八幡宮を勸請して津堂村の氏神として祀つた。斯くて引續いて近年に及んだが明治四十二年神社合祀の事あつて、當社は小山村の産土神なる牛頭天王の社に、遷宮合祀せらるゝ事となつた。ついで同四十五年頃、津堂の氏は、八幡宮址に記念碑を建て、其の址を保存せんとし、其の碎石を得る爲め、古墳上の巨岩を掘出さんとして、茲に計らずも巨大なる石棺を發見するに至つたのである。

此の古墳は、南東に面せる前方後圓の大墳で、今も其の周圍には濠を繞らした形跡が、大體に渡つて明に認められる。

掘り出された石棺は、蓋石と身石とは各別石よりなるもので、身石も亦數枚の石が繼ぎ合せて出來て居る。そして蓋石には八個、身石には四個の繩掛けの大突起がある棺内からは發掘と同時に、管玉、勾玉、棗玉の玉類を始め、鏡、刀劍、等の埋藏品が發見せられた。

此の石棺に就ては、發見と同時に、故坪井博士、柴田常惠氏、梅原末治氏、大道弘雄氏等が、實際に就て調査研究を重ねられ、其の報告は當時の新聞、雜誌に、詳細に發表せられたのであるから、其等を參考するとよい。

柏原船

聊か歴史の範圍に入り込み過ぎるが、柏原の昔を偲ぶ爲め、柏原船と大和川改修の

事を、書き加ふことにした。

大和川は今の新川が開鑿せらるゝ前は、柏原から八尾を經由し大阪城の東を流れて、淀川に會して居つたのである。其頃は治水の實が擧らず、一端豪雨があると堤防決潰して、沿川農民の苦む事は頻りであつた。中にも元和六年の氾濫、寛永十年のそれの如きは、被害の最も甚しかつた例である。茲に於て堤防修築は實に急務中の急務であつたが、何分にも巨額の費を要することで、頗る難事とせられて居つた。

然るに末吉孫左衛門出で、大阪柏原間に舟運の便を開き、其の収益を擧げて堤防修築の費に當てんとして、終に幕府の許可を受け、寛永十三年より所謂柏原船を創むる事となつた。之れが所謂柏原船の起りである。

斯くて翌十三年には、今の柏原町字本郷ほんごうより七八町南方の、荒蕪の地を拓きて新町を起し、四十艘の船を浮べて、漸く交通を開くに至つた。其の後寛永十七年には更ら

に三十艘を増し、合計七十艘の小船が、平野川、了意川りょういの井路筋せいじを上下する様になつた之等の船は長さ四間許りの、二十石積みであつた。

然るに明治の御代に至ると漸く衰へ、鐵道の開通後は殊に著しくなつて、やがて廢せらるゝに至つたのである。

大和川の改修

前へに記せる如く、大和川の氾濫は、沿川の農民の最も苦痛とせる所であつた。

明暦三年に至つて、舊河内郡今米村から、中甚兵衛なかじんべなるもの出で、此の障害を根本的に除かんが爲めに、蹶然起つて江戸に赴き、當局に改修の必要を迫つたが、終に容れられなかつた。其の後甚兵衛は、機會ある毎に幕府に懇請して止まなかつた。

斯くて元祿十六年に至つて、機漸く熟して改修の令を見るに及び、姫路の城主本多中務大輔を始め、稻垣對馬守、伏見主税、大久保甚兵衛、代官萬年長十郎等が、此の

事に當ることとなり、中甚兵衛は積年の宿望の達せらるゝを欣び、茲に久しく考査實測せし設計案を提出して、欣躍して使役に盡した。

工事半ばにして本多中務は、病に罹り進捗の上に、多少の障礙が起つたが、工事は幸に着々と進みて、寶永二年十月には、今の如くに開鑿工事の竣成を見るに至つて、始めて中甚兵衛の素志が貫徹したのであつた。

三田 淨久

私は、耳順の齡を以て親しく河内を巡行し、卒先して、埋没せる名蹟を闡明したる功勞者、三田淨久の小傳を掲げなければならぬ。

淨久、姓は水野氏、父は庄右衛門と稱して秀頼に仕へ、元和の大阪役に戦死を遂げた忠臣であつた。其時淨久は年纔かに八歳、辛くも家僕に扶けられて遁れ、後、母の姓を嗣いで、三田七右衛門と名乗り、屋號を大文字屋と稱して大阪に住んで居つた。

其後、柏原船の開通に係はつて功があり、ついで柏原に移つて家運榮へ、終に豪農となつて、元祿元年十一月、八十一歳で歿した。

淨久は松永貞徳ていとくに就いて俳諧はいかいを學び、傍ら狂歌をも能くして居つたが、貞徳の歿後は、西山宗因そういん一派の所謂談林派だんりんぱの雅客と、文墨風雅の交りを結んで居つた。其後年六十を過ぎて後、故山の名所古蹟が荒廢に委せられ居るを嘆き、終に老軀ひつさを提げて、普く國內の山野を跋涉し、或は古蹟を探ね、舊史に徴し、口碑に聽くなど、數年の苦心を積んで、漸く河内鑑かほちかぞめ名所記六卷を世に著すに至つた。

此の河内鑑は、並河祖衡なみかの『河内志』に先立つこと約五十年、秋里あきさと夕しよの河内名所圖會あしわけに先立つこと約百年、此種の案内記の先驅をなした一無軒道治の蘆分船あしわけぶねに續けるもので、其の卷首には著者の交友北村季吟の序と、首尾には岡田惟中の跋ある貴重の書である。

尙同氏の宅には、古くより柏原清水かしはらしみづと言ひ傳ふる井泉がある。

因に、當町の舊家寺田七郎平氏の宅には、明治二十三年四月二十四日、時の皇太后陛下、河内御巡幸の途次、御小憩あらせられて、此處に御晝餐を召させられた事があつた。其砌御意を得られ給ひし庭内の紅梅は、今も春毎にゆかしく馨かほつて居る。

弓削神社

此の社は、志紀村大字弓削ゆけの東北端に在つて、饒速日命にぎはよひを祀れる式内の舊社である。神域は東西三十一間、南北二十四間許りで、境内さまで闊くないが、攝社末社も一通り備はつて居る。

此の境内には、古くから『延命水』と呼べる井戸があつて、如何なる旱魃の日も靈泉滾々まをとして湧き、此の水を口にすれば、長壽を保つとして信仰せられて居る。

物部尾輿の古城址

此の城址と傳ふる處は、志紀村大字弓削ゆけの西北部で、面積二町餘、今地名を『城田しろでん』と呼んで居る。

傳説によると、物部の尾輿は此地に生れたる人で、欽明天皇に仕へて、忠勤を勵んで居つた。會々、天皇の十三年、百濟から佛教が渡來して、朝廷にては其の信仰の可否に就て、蘇我物部兩氏の間に、甚しき論争があつた。そこで物部の尾輿は、蘇我稻目に備ふる爲めに、此の地に一城を構築して、武備を怠らなかつた。

其後尾輿の子守屋が、稻目の子馬子の爲めに、居城澁川の邸を攻めらるゝに及び、此城も亦焼き拂はれて廢滅に歸したと、言ひ傳へて居る。

守屋の戦死せし澁川の邸は、中河内郡龍華村大字勝軍寺の東北數町の處で、此の地からは距離も甚だ近いのである。物部氏が此近傍を領有して居つた事實より見て、弓削の廢城も何等かの關係があつた様に思はれる。

玄寶僧都の邸址

大字弓削の邑中に、東西四間、南北五間許りの古屋があつて、今に玄寶屋敷と呼んで居る。

玄寶は此地に生れて、後、聖武孝謙の二帝に仕へ、博學と高德とを以て世に聞え、殊に佛學の淵奥を極めたる名僧であつたが、道鏡が朝に勢力を得てからは、其の性格と相容れず、終に退隱して此の地に閑居し、後諸國を遍歴して、備中湯川寺で遷化した人である。

家原寺址

弓削の西北方十數町に、大字老原がある。此の邑の西北に當りて、今地名を「堂垣内」と呼ぶ處がある。

此處は往昔、家原寺、又は清原院と云へる巨利のあつた處で、天平勝寶の古に於て

は、堂塔伽藍悉く完備して、同八年には孝謙天皇親しく御拜あつて、寺領の寄進もあつた。然るに世の變遷と共にいつか衰頽に傾き、天正の頃には織田氏の兵火に罹つて其の堂宇悉く灰燼に期して茲に全く廢滅したと言ひ傳へて居る。今は昔の面影を偲ぶべき、二三の礎石が残れるのみである。

私は今本編を擲筆するに當つて、河南の工藝品として此處に二三紹介したいと思ふものがある、それは譽田轡と轡火箸と、小山團扇との三つである。

譽田轡と火箸

これは古市町市口才次定次が、今猶製作し居れるもので、精巧なる轡と鈴蟲の鳴く音の如き妙音を、響かしむる火箸とである。家傳によると、市口の祖甚七なるもの、神功皇后三韓征伐の砌、海中に沈める古碇にて轡を作つて、献上せしより起り、火箸は慶長五年島津義弘に献せるに創まれる、古き由來のあるものである。

小山團扇

藤井寺村大字小山にて、中野某一家のみが作り居る團扇で、此の特徴、は骨勁つよくくして、使用久しきに耐へ、柄を座上に立てても倒れざるに在る、永祿の頃甲州の謀臣、山本勘助かしのけはるゆき晴幸が、三好氏の動靜を探るが爲め、小山村に來つて、淺野文吾と稱して團扇を作つて世を忍び、後某に秘法を傳へたと云ふ、由來あるもので、徳川時代には年々將軍家に獻納して居つた、世に稀れな團扇である。

此外石川村大字大ケには、隠れたる藝術家とも賞したき、金銀象嵌ぞうかんの製作者、村上好弘なる者が居る。

又磯長村大字太子には、森某と稱する堆朱すゐしゆの製作に秀でた人も居る。之れ等の人の製作品は、孰れも精巧の妙を極めたものであるが、今少しも世に現はれて居らぬ、私には之を此儘に朽ちさすには、誠に忍びないので特に此處に附記して置くのである。

附 録

南河内に於ける諸陵墓一覽表

(年代順)

●天皇陵

仲哀天皇惠我長野西陵	第十四代	藤井寺村字岡
應神天皇惠我藻伏崗陵	第十五代	古市町大字譽田
允恭天皇惠我長野北陵	第十九代	道明寺村大字國府
雄略天皇丹比高鷲原陵	第二十一代	高鷲村大字南島泉
清寧天皇河内坂門原陵	第二十二代	西浦村大字西浦
仁賢天皇埴生阪本陵	第二十四代	藤井寺村大字野中
安閑天皇古市高屋丘陵	第二十七代	古市町大字古市

諸陵墓一覽表

諸陵墓二覽表

敏達天皇河内磯長中尾陵

第三十代

磯長村大字太子

用明天皇河内磯長原陵

第三十一代

磯長村大字春日

推古天皇磯長山田陵

第三十三代

山田村大字山田

孝德天皇大阪磯長陵

第三十六代

山田村大字山田

後村上天皇檜尾陵

第九十七代

川上村大字寺元

●皇后陵

應神天皇皇后、仲姬命仲津山陵

道明寺村大字澤田

安閑天皇皇后春日山田皇女古市高屋陵

古市町大字古市

欽明天皇皇后石姬皇女磯長原陵〔敏達陵〕〔下同陵〕磯長村大字大字

●皇子、皇女墓

景行天皇皇子日本武尊白鳥陵

古市町大字輕墓

繼體天皇皇女神前皇女墓〔安閑陵〕〔下同陵〕

古市町大字古市

敏達天皇皇子竹田皇子墓〔推古陵〕〔下同陵〕

山田村大字山田

用明天皇皇子聖德太子磯長墓

磯長村大字太子

太子母穴穗部間人皇后

合葬（三骨一廟）

太子妃膳手皇女

用明天皇第二皇子來目皇子埴生岡上墓

埴生村大字埴生野

後嵯峨天皇中宮姑子分骨所

磯長村大字太子

諸陵墓一覽表

天野山

酒造る寺たのもしや雪の暮

西吟

観心寺

雀るや藁でふきたる塔のやね

寸馬

古寺や秋悲しげに佛達

蝶夢

附言

一、私が始めて筆を執りよしたのは、昨冬の十二月廿五日でした。それから學校の冬休みと日曜日とを利用して、大體一通り郡内を巡り、或は寺社を訪ね又は古老に聞き、公務の閑を見ては、秃筆を呵して書き綴り、此の二月十一日に稿を脱しました。

聖徳太子の千三百年御遠忌祭に、間に合はせようとした爲め、何分にも時日が不足して困りました。

二、斯んな譯で、充分なる調査も出來ず、誤りもあれば漏れた點もあり、配列も、體裁も共に整はず、殊に文章が拙くて、却て光輝ある河南の靈地を汚し、又は榮譽ある名流の人格を辱かしめはしなかつたらうかと、今更らながら懼れもし、愧ぢ

もする次第であります。

一、執筆に當りて、富田林中學校長三宮元勝氏、河南高等女學校長井上一氏の、用務繁劇の中から、特に貴重なる時間を割いて、懇切周到に指導せられ且つ誤謬を訂正して下さつた事は、私の深く感謝する所であります。

尚、喜田博士、岩井武俊兩氏の、歴史地理誌上の記事と、木崎愛吉氏の『金石文の研究』とは大に参考となりました、茲に特筆して敬意を表する次第であります。

一、此の書は、學術上の見地から、正確なる文獻に依つて、細微に考證穿鑿したのでは無く、旅行の際幾分の案内にもならうかとの、趣旨に外ならぬ事を、豫め御断りして置くのであります。

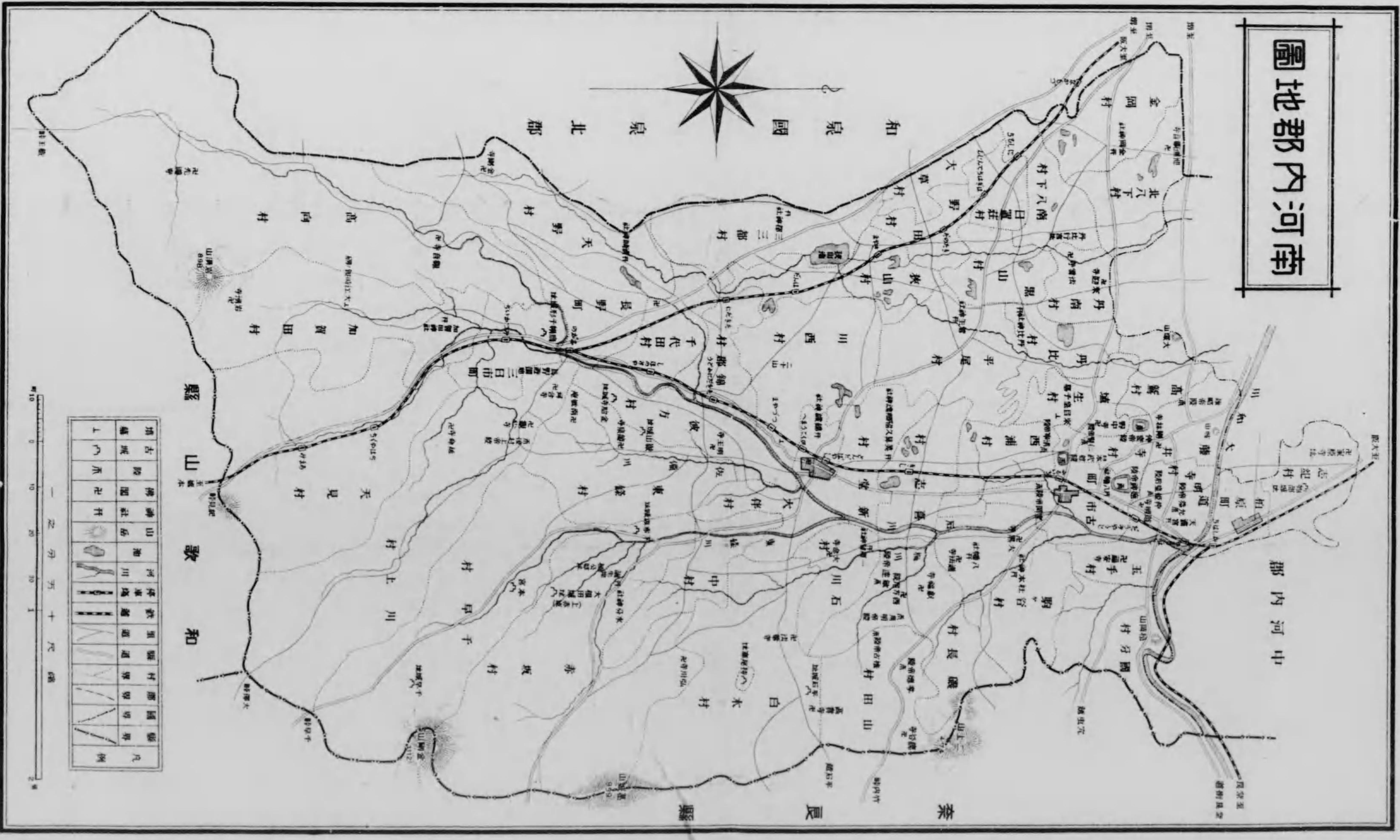
大正十年三月

富田林中學校菊水寮にて

長谷川彌榮

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

圖地郡内河南



頂	山	佛	山	河	飲	重	村	郡	國	縣	凡
標	標	圖	社	池	川	橋	川	橋	橋	橋	橋
上	爪	足	井	井	井	井	井	井	井	井	井

一 之 分 五 十 尺 碼

和 泉 國 泉 北 郡

郡 内 河 中

奈 長 縣

縣 山 歌 和



巡 覽 表

南河内郡巡覽概程

次の巡覽表は、編者の経験せる行程を基として、ほんの御参考までに、附記したのであるから、之れに依つて、遠隔の方や、健脚の方は、適當に取捨せらるゝ必要があらうと思ふ。

御陵參拜

第一日

道明寺驛下車——土師神社——道明尼寺——允恭天皇陵——仲姫皇后陵——應神天皇陵——葛井寺——雄略天皇陵——仲哀天皇陵——野中寺——仁賢天皇陵——來目皇子墓——清寧天皇陵——日本武尊陵——安閑天皇陵——安閑天皇皇

巡 覽 表

巡覽表

后陵——古市驛乘車

行程約、四里弱

第二日

古市驛下車——白鳥神社——(臥龍橋渡過)——駒ヶ谷杜本神社——(飛鳥、春日

ヲ經由)——孝德天皇陵——推古天皇陵——用明天皇陵——厩戸皇子廟、叡福

寺——西方尼院——敏達天皇陵——通法寺——壺井八幡宮——(石川ノ假橋ヲ

渡ツテ)——太子口喜志驛乘車

此ノ行程、四里

楠氏遺蹟巡覽

第一案

富田林驛下車——(富田林町通過)——二上山——(寛弘寺村——神山村經由)——

寄手塚身方塚——楠公誕生地——(上赤阪城址)——水分神社——(立戻)——下

赤阪城址——南妣庵——觀心寺後村上天皇陵——河合寺——長野驛乘車

此ノ行程、五里

第二案 (金剛登山)

富田林驛下車——(富田林町通過、寛弘寺、神山經由)——楠公誕生地——水分神

社——(登山)——金剛山——千早城址——(川上村ニ出テ)——後村上天皇陵觀

心寺——長野驛乘車

此ノ行程、七里

巡覽表

第三案 (金剛登山)

長野驛下車——河合寺——後村上天皇陵觀心寺——千早城址——(登山)——金剛山——水分神社——楠公誕生地——(神山、山中田經由)——富田林驛乘車
此行程、七里

第四案

長野驛下車——南妣庵——(千早街道ヲ進ミテ)——(富山、肩衝塞ノ切通シ經由)——千早城址——登山——金剛山、——(歸路)——(千早村ニ歸リ川上村ニ出デ)後村上天皇陵——觀心寺——長野驛乘車
此行程、約六里
(金剛登山ハ成ル可ク早朝ニ出發スルコト)

其他社寺參拜順路

●高貴寺と弘川寺詣で

富田林驛下車——(山中田、別井經由)——法華寺——平石城址——高貴寺——(持尾經由)——弘川寺西行墳——(南加納別井、山中田經由)——富田林乘車
此行程、四里半

●道明寺附近

道明寺驛下車(若クハ柏原驛下車)——(石川ヲ渡過)——國分松岡山古墳——玉手安福寺——土師神社——道明尼寺——葛井寺——野中寺——(野中ヲ經由)——譽田八幡宮——譽田停留場ニテ乘車

此行程、四里弱

巡覽表

●瀧谷不動より観心寺詣で

瀧谷不動驛下車——瀧谷不動——(東條村ニ出デ)——瀧泉寺——南妣庵——後
村上天皇陵観心寺——河合寺——長野遊園地——長野驛乗車
此行程、三里半

●天野山金剛寺詣で

長野驛下車——(西代經由)——金剛寺斥候松の址——長野ニ歸テ乗車
此行程、三里

●延命寺より観心寺詣で

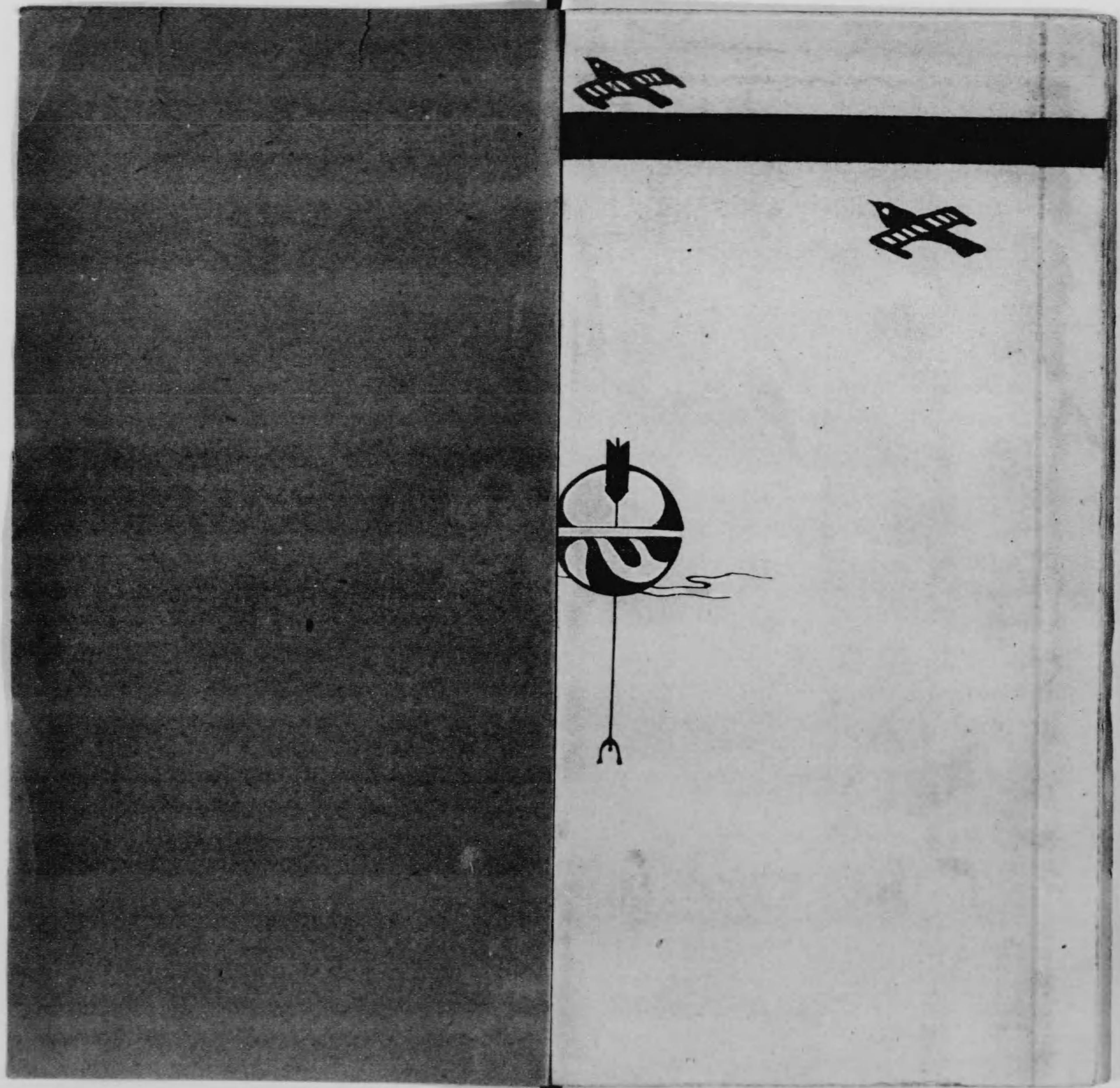
長野驛下車——烏帽子形城址——三田市——延命寺——後村上天皇陵観心寺
——河合寺——長野驛乗車(或ハ此反對)
此行程、三里

●二上山登山

古市驛下車(駒谷、飛鳥、春日經由)——鹿谷寺址——二上山登山——岩屋峠——
(春日經由)——叡福寺——太子口貴志驛乗車
此行程約、五里
(二上山ヨリ當麻寺ニ詣デ、大和ニ出ヅルモ一案ナラン)

●岩湧寺詣で

三田市驛下車——加賀田神社——大江時親の碑——岩湧寺——三田市驛ニ歸テ
巡 覽 表



394
50

10.6.13

終

